

**Sheraton Boston Hotel (39 Dalton Street, Boston, MA)**  
**Meeting Rooms (Fifth Floor, South Tower): Arnold, Jamaica Pond, Olmsted, Riverway,**  
**The Fens, Public Garden**

**Thursday, March 19, 2020, 8:30 a.m.–5:30 p.m.**

**(On-site Registration and Check-in: Fifth Floor Lobby)**

*Papers whose titles appear in Japanese in the program will be delivered in Japanese; those with only English titles will be delivered in English*

**8:30 a.m.–10:10 a.m. — Session 1**

**SESSION 1-A: PEDAGOGY PANEL [ PUBLIC GARDEN ROOM ]**

*Chair: Shinji Sato, Princeton University*

**Panel Title: 「移動する人々とことばの教育: 「つながる、かかわる、かえる、つくる」ことの重要性」 (Mobility and Language Education: The Importance of “Connection, Relation, Transformation, and Creation”)**

移民、難民、技能実習生、知的労働者、留学生、不法移民、旅行者と世界は以前にまして移動する人々で溢れている。そして、「異なる」人々、そして、言語の交わりは豊かさをもたらすだけでなく、同時に、憎悪や嫌悪の感情も生み出し、様々な軋轢も生まれている。現在日本においてはかつてないほど長期・短期滞在の外国人が増え、日本の経済を潤しているだけでなく、同時にさまざまな社会問題も引き起こしている（芹沢2019、望月2018）。また、米国においても移民政策はつねに議論的であり、不法労働者、アラブ・イスラム系移民、中南米からの移民の問題は常にニュースになっている（西山2016、田原2018）。

これらの問題は外国語教育とは無縁な問題なのだろうか。外国語教育には当該国の言語文化の教授といった機能的な目的だけでなく、幅広い視野を身につけたり、文化意識・異文化対応能力を高めるなどの教育的な目的もある。したがって、外国語教育においても、お互いを知り、かかわることはもちろん、お互いが暮らしやすいコミュニティや社会を創ることまでも視野に入れる必要があるのではないだろうか。なぜなら、お互いを知り、かかわる目的は、円滑なコミュニケーション、ひいては、お互いが暮らしやすいコミュニティや社会の構築のためだからである。本パネルでは、それぞれ3名のパネリストが、日本語教育がこのような移動する人々とことばの問題にどう貢献できるのかという課題について言語学・人類学・社会学・教育学の視点（牧野 1996, 當作2013, 神吉 2015, 佐藤・村田2018）から考察を行う。このパネルではとくに米国、日本の日本語教育を事例としことばの教育に何ができるのか議論してみたい。

**「「移動する人々とことばの教育: ことばの教育に何ができるのか」：ソトからウチに来て労働者に加わってくれる移民労働者たち」 (Mobility and language education: How can language education help immigrant workers transition from outsiders to insiders?)**

**Seiichi Makino, Princeton University**

私は長年日本語教育と言語学の立場から「ウチとソト」の比喩的拡張を使って説明できる様々な言語と文化の分析をしてきた。今回のテーマはソトから日本へ移住して日本人にとってのウチの空間で仕事に就き、住み付く「外国人労働者」（移民労働者）の問題である。

私は言語教育・文化教育はすべてなんらかの形でソトの人々と「つながる」ことだと理解している。しかし、移民たちが日本に来る場合、われわれも移民たちとつながっていかなければならない。その問題の中には次のようなものが入る。1. 移民法を中心とする法的問題、2. 移民労働者との交流、3. 職場に応じた日本語と日本文化の適切なプロフィシェンシーレベルを決め適切なテストを行い、レベルを判定する、4. 移民労働者たちが働いている職場文化の社会的・人類的分析とその教育への応用、などを挙げることができる。

日本語教育者としてとりわけ考えなければならない点は、日本で働く移民労働者たちの日本語能力と文化能力をどうやって測るかではないだろうか。労働者は当然それぞれの職場で求められる様々なレベルの技能のプロフィシェンシーのレベルに達する。そのためには学びやすい教育が必要である。しかし、雇用者と被雇用者の意見を見てみると、専門性の高い職種では日本語の読み書き能力に問題があるという指摘が多いようである。ソトからの移民労働者とともに働く日本人も移民たちの母国に行ってそこで労働文化を学ぶべきではないだろうか。ソトからウチへ入ってくる移民労働者たちの母国をたずねて、その言語と文化へ「つながる」ことが必要であろう。

**「移民受け入れ社会」としての日本における日本語教育を再考する」 (Reconsidering Japanese language education in Japan as a “host society”)**

**Uichi Kamiyoshi, Musashino University**

発表者は、日本国内で日本語教育に携わっている。日本では、外国人が急激に増加しており、外国人の受け入れや日本語教育に関する法的、政策的な整備が進みつつある。そのような中で、改めて「日本語教育はなんのために行われるのか」という点に関して問題意識を有している。

「移民社会」の様相を呈する日本において日本語教育実践を行う際、日本語の習得が起きなければ日本語教育として行う意味がないと言われることもある。確かに、日本語が習得されることは、日本語教育の一つの重要な側面である。しかし、日本語の習得が起きることを一義的な価値としていては、日本語教育に未来はないのではないだろうか。AIの発達により、意思の疎通のためであれば、機械翻訳を通して実施できるようになる。また、ICT技術の発達で、日本語を習得するだけであれば、教室における学習にわざわざ参入する必要はなくなりつつある。自分の好きな場所・時間で学ぶためのリソースがネット世界に存在している。一方で、多くの人が直感的に、機械翻訳でやりとりをすることと、自分自身が外国語を習得してやりとりをすることの情動的側面で違いを感じているだろう。このようなことから、人と人が関係性をつくる、コミュニティをつくる、社会をつくるという目的に向けた、「手段としての日本語教育」「場としての日本語教育」ということが、日本語教育の社会的な意味としてより大きくなってくると思われる。このような問題意識はアメリカの日本語教育にも関連する。日米それぞれの文脈において現状と課題を整理し、これからの日本語教育のあり方を再検討することが必要となるだろう。

**「VUCAワールドの時代の日本語教育：「つながる、かかわる、かえる、つくる」教育」(Japanese language education in the era of VUCA: World education for “Connection, Relation, Transformation, and Creation”)**  
**Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego**

21世紀の世界はVUCAワールドと呼ばれる。VUCAとはVolatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を組み合わせたものである。アフガニスタンの戦時下の状況を指してアメリカの軍隊が使い始めた言葉であるが、ビジネス界で、21世紀の世界は戦争がなくても、激動の、予測不可能、複雑な世界であるとして使い始め、一般化してきた。21世紀を通してVUCAワールドが続くと予想されており、教育界でもVUCAワールドを生きることができる人間を育てることが教育の任務であると言われるようになってきた。

外国語教育には、文法・語彙などの知識を与え、現実社会で言語を使えるようにする機能的目的と、外国語を教える中で、視野を広め、異文化交渉能力など、いわゆる人間力、社会力を発展させる教育的目的がある。日本語教育を含め、これまでの外国語教育では、機能的目的が強調され、教育的目的には、あまり注意が向けられなかった。アメリカの日本語教育を考えた際、学習者のうち将来実際に日本語を使うのは全体のわずかと言ってよいだろう。現在、いろいろな場所に移動して活動する人間が増加しているが、日本語を学習し、人間力、社会力を身に付け、どこに行ってもほかの人たちとつながり、社会と関わり、問題を解決し、社会を変え、新しい世界を作っていく能力、社会に貢献する能力を発展させる教育的目的を果たすことこそ、アメリカの日本語教育の新しい方向性ではないだろうか。本発表ではこの新しい日本語教育の理論的基盤とアメリカにおける具体的実践活動について議論する。

**Discussant**

**Shinji Sato, Princeton University**

**SESSION 1-B: SIG PANEL : JAPANESE AS A HERITAGE LANGUAGE (JHL) [ THE FENS ROOM ]**

**Chair: Hitomi Oketani, Eastern Michigan University**

**Panel Title: 「日本語教育推進法」の成立と今後の日本語教育における日本国内外の連携に向けて」(Newly Enacted "Promotion of Japanese Language Education Act" and the Importance of Collaboration between Japan and Abroad)**

令和元年6月に施行された「日本語教育推進法」は、日本国内と海外の日本語教育が同じ土俵で論じられる新しい「連携」時代の到来を意味する。本パネルはその一端を示すものである。パネル1では、この推進法の原案の問題点を指摘し、法案成立に至る過程で原案修正を求める署名運動の中で明らかになった海外永住者の継承語としての日本語教育の現状をまとめ、更に法案成立後の次のステップとして「海外における日本語教育推進関係者会議（仮称）」を設立し、継承日本語教育（JHL）・外国語としての日本語教育（JFL）の枠を超えて海外の教師組織が連携し、日本政府に支援の向上を求めることを提案する。パネル2では、JHL教育での指導方法をJFL教育へ応用した例を示しながら、より効果的な日本語教育を目指して、今後もJFL/JHL教育がその研究と実践において、連携と協同が有益であることを提言する。パネル3では、海外で育つ邦人の幼児の日本語習得に関する実証的研究を踏まえ、乳幼児期・学齢期前半の母語・母文化教育の重要性をバイリンガル・マルチリンガル育成の視点から示す。最後に2名のディスカッサントが、前半はプロフィシェンシーの見地から、学年齢や学習環境の差を克服する日本語教育の目的設定の可能性を検討し、日本語教育界全体が視野を広げ、日本語教育を世界レベルで考えていく必要性を訴える。後半はJFLとJHLの「連携」、国内外の「連携」、小学校・中学校と幼児期との「連携」、世界各地で地域差を超えて互いの「連携」の重要性及び日本語教育海外関係者会議の準備に向けて新しい組織作りへの取り組みを提言して本パネルの総括とする。

**「日本語教育推進法」に向けた署名活動を通して見えてきたこと」(Findings from the signature campaign to establish the "Promotion of Japanese Language Education Act")**  
**Toshiko Calder, Princeton Community Language School**

「日本語教育推進法」は、日本語教育を望む全ての者に対し、本人の希望、状況、能力に応じて教育を受ける機会を最大限に確保するという基本理念を掲げている（総則第3条）。その成立過程で、原案に、日本を出自として海外に永住する渡航者次世代のJHL教育への支援が欠けていることが問題になり、世界各地から多数の請願の署名と付帯意見が集まった。

その要請が明らかにした現場の実態とは、①在外のJHL教育の多くが政府支援の届かない親や教師の自助努力による中小規模の学校に委ねられていること、②こうした弱小の教育機関が最も必要とするものは教員養成と教材開発への支援であり、情報交換のための相互連携であること、③一方、帰国生の支援を建前とする政府認可の補習校では、生徒の過半数が永住予定者という実態がありながら、支援対象は帰国生に絞られ、永住者や日本国籍を持たない者は枠外にあることが問題とされた。同時に戦後渡航者のJHL教育が文科省と外務省の行政の谷間に陥り、支援の外に置かれてきたことも指摘された。運動の結果、法案には海外の要請が盛り込まれたが、成立した推進法の基本理念を現場に繋ぐためには、在外の教師組織が連携して日本政府へ有効な働きかけを行う必要がある。まずこれまで行政の枠外にあったグラスルーツの学校を含む教育機関の正確な現状把握が必要であり、それを踏まえて具体的な政策支援の方策を提示すべきである。日本語教育の形態が多様化する折から、領域を超えた海外の教師組織が連携し、日本政府に支援の向上を求めるために「海外における日本語教育推進関係者会議（仮称）」の設立を提案する。

**「JFL/JHL教育の研究と実践における相互の連携と協同をめざして」(For cooperation and collaboration in research and practice between JFL and JHL education)**  
**Masako Douglas, California State University, Long Beach**

本発表では、JFL教育とJHL教育が研究と実践の分野で相互に知見を分け合い連携と協同をすることが双方にとって有益であることを提言をする。推進法では、基本的施策（第12～26条）で海外の日本語教育を「外国人等に対する日本語教育」と「在留邦人の子等に対する日本語教育」の2つに分けている。現時点までの海外の日本語教育の研究と実践でもこの2つの日本語教育が知見を分け合うことは無かった。しかし現実の教育現場を見ると、この2領域が全く別の分野であるとは言いがたい実情がある。例えば高校と大学のJFLの日本語コースにはJHL学習者が在籍していることがある。このいわゆる「混合クラス」では、従来の外国語教育のアプローチは教育効果があがらないという指摘がある（ダグラス, 2019; Beaudrie, 2010, 2012; Carreira, 2017; Yu, 2008; Zhang & Davis, 2008）。しかしながら、予算の関係でJFL/JHL用に別々のクラスを作ることができない現状では、混合クラスでの有効な指導方法の開発が急務とされている。当発表では、JHL教育での指導方法をJFL教育へ応用した例として、上級日本語コースの日本語力の低いJFL学習者の書きの指導とJFL初級コースの書きの指導におけるトランスラングゼージングのアプローチの使用とその結果の検証、及び混合クラスでの差別化のアプローチによる指導効果の検証を行う。そしてこの結果をもとに、より効果的な日本語教育を目指して今後もJFL/JHL教育がその研究と実践において連携と協同をしていくことが有益であることを提言する。

**「バイリンガル・マルチリンガル育成の視点からの母語・継承語としての日本語の育成」(Developing Japanese as a mother tongue/heritage language from the viewpoint of bilingual/multilingual development)**  
**Hitomi Oketani, Eastern Michigan University**

「日本語教育推進法(第3章第2節第19条)」に「国は海外に在住する邦人の子、海外に移住した邦人の子孫等に対する日本語教育の充実を図るため、これらの者に対する日本語教育を支援する体制の整備その他の必要な施策を講ずるものとする。」と示された。これまで米国においては現地語での学校教育と並行して、母語・継承語である日本語の維持・伸長のために、コミュニティベースでの継承日本語学校や補習授業校等で授業が行われてきた。先行研究ではマイノリティ言語である母語（第一言語）の現地語(第二言語)に及ぼす有用性（カミンズ, 2001）、特に言語形成前半（0～8歳前後）における母語・母文化習得の重要性（中島, 1998）が指摘されている。本パネルでは、米国に長期滞在する邦人や米国に移住した邦人の子等（K-12）が混在する大規模補習授業校(A校)において、日本語教育も含む教師養成大学との共同5カ年プロジェクトの結果を踏まえ、バイリンガル・マルチリンガル育成の視点から就学前の母語・母文化育成の可能性を探るものである。このプロジェクトでは、子どもを取り巻く保護者・学校(A校)及びその講師・大学が三位一体で、対象となる就学時前後の子どもの（1）日本語レベルの把握（2）乳幼児・園児を持つ親への啓発（3）乳幼児・園児・小学低学年を担当する講師への研修等を通じ、支援を行った。特に本パネルでは、教科学習を始めるにあたり、園児にどのようなレディネスが必要なのか、更には日本国内の乳幼児期・学齢期前半の母語・母文化教育に米国の知見が伝えられるとしたらどのようなことが可能であるか等を探るものである。

**Discussants**

**Suwako Watanabe, Portland State University**  
**Kazuko Nakajima, University of Toronto**

**SESSION 1-C: SIG PAPERS (JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES; JHL [JAMAICA POND ROOM])**

**Chair: Yukiko Hatasa, Hiroshima University**

**「研究・教育を目的としたアカデミック・スピーキングコーパスの構築とその活用方法」(Academic speaking corpus for research and pedagogical purposes: its design and usage)**  
**Chiemi Hanzawa, Yokohama National University; Katsuhiko Ito, Tokyo University of Foreign Studies**

日本の大学や大学院に留学する留学生が増加している中、アカデミック・ジャパニーズの研究分野も広がりを見せているが、依然としてレポートや論文の書き方を中心としたアカデミック・ライティング関連の研究が多く、話し言葉を対象にした研究は少ない。

そこで、本研究では話し言葉である意見陳述と説明および経験談をアカデミック・スピーキングを構成する談話と捉え、それらの発話データの収集とコーパス化を試みた。

発話データは主に日本の大学や大学院に在籍する日本語母語話者と英語、韓国語、中国語を母語とする中上級日本語学習者からQ&A方式で収集した。質問はTOEFLとIELTSのスピーキングテストをもとに、意見陳述と説明、経験談につい

て計50問を設定し、その中から偏りがないように10問を選択して質問した。データは録音、文字化されたもののほか、調査協力者の背景情報も収集し、日本語学習者の場合は日本語学習歴およびSPOT (Simple Performance-Oriented Test) の情報も可能な限り収集した。これまでに約200名分のデータを収集済みで、順にコーパス化を試みている。コーパスはWeb上で公開予定で、文字化テキストデータと音声データをダウンロードすることができる。また、背景情報からのデータ検索およびテキスト検索も可能となっている。

本発表ではコーパス構築の経緯と使用方法を紹介するとともに、研究目的での使用例として中級と上級レベルの学習者の意見陳述データの表現形式に着目した分析結果を紹介する。さらに、授業での使用例として、同じ質問に対する日本語母語話者、中上級学習者の意見陳述を学習者に聞かせ、その内容、談話構造、文末表現などの違いについて気づきを促す活動案を紹介する。

### 「COIL型学習を用いた日米学生による協働ビジネスプロジェクトの取り組み」“(COIL project in Business Japanese class)

Tomoko Shimomura, Arizona State University; Chie Fujikake, Nanzan University

本発表は、アリゾナ州立大学のビジネス日本語クラスで実施したプロジェクトの実践報告である。授業で学んだビジネスに関する用語やレポート作成などの技能を実際の場面で生かすことを目的とし、南山大学が取り組んでいるNU-COIL (Nanzan University - Collaborative Online International Learning)に参加し、産官学連携型COILクラスとの協働プロジェクトを課題として取り入れた。このプロジェクトは、愛知県の企業が提示した課題に対し、日米の学生同士がラインなどのオンラインコミュニケーションツールを用い協議し、最終的にグループで創作したアイデアを音声を含めたスライドで発表するというものである。両方の学生は日本語のみ使用し、学生の意見を尊重するため、グループが取り組むトピックについて教師は意見を挟まないようにした。ただし課題の進捗状況の確認の為、各学生に自分が話し合いの際提示したアイデアと毎回のグループ協議についての報告書をビジネスレポートとして提出するという課題を与えた。発表に際して、日本語クラスの学生は日本人学生から日本語の使用に関するアドバイスももらった。日本にいる大学生と日本語で話し合い協働学習としての課題に取り組むのは、ほとんどの学生にとって初めての経験であり、意見交換の際には文化の違いによる意思疎通のずれが生じることもあった。プロジェクトの評価は教師による学生への個人評価に加え、COILクラスに参加した企業の担当者からのグループ評価も含まれた。今回の発表では、プロジェクト実施における学習者の反応と今後の課題についても考察したい。

### 「日本語の Academic Speaking の評価と Good Speaking の特徴」(Assessment of academic speaking skill and characteristics of good speaking)

Yukiko Hatasa and Chisato Yokoyama Hiroshima University

日本国内の留学生は10年間で倍増し、大学進学を目指す留学生も急増している。しかし、大学進学で参照される日本語能力試験 (JLPT) は読解と聴解のみで(Noguchi et al. 2008, 門倉, 2005).発話を評価していない。そのため、JLPTは漢字圏学習者に有利なテストとなっている。また、読みはできるが話せない留学生が増えているといった問題が生じている。そこで本研究では、日本語学習者のアカデミックスピーキング能力を測る評価法を開発し、評価の妥当性を発話の流暢さ、正確さ、複雑さ、機能的適切さ(Kuiken & Vedder, 2018)を基に検証する。さらに評価が高い学習者、評価が低い学習者、そして母語話者の発話の特徴を比較する。

調査協力者は日本人大学生30名と日本語学習者60名、計90名である。ILETSとTOEFL iBTをもとに論証課題30問を作成し、各協力者に4問ずつオンライン提示し、回答を録音した。この発話を、CEFR (Council of Europe 2001)TOEFL iBT, ILETSを基に作成したSpeaking 評価基準をもとに評価した。さらに、学習者の発話の流暢さ、正確さ、複雑さ、機能適切さを測定し、評価基準との関係を統計的に分析した。その結果、評価基準は複雑さと強い関係にあり、正確さ、機能的適切さとも関係があったが、流暢さとの相関は低かった。そこで、評価が高い学習者、低い学習者、そして、母語話者の発話の複雑さを質的に分析したところ、接続表現、複文の文型、文末表現、語彙の使用などに違いがみられた。本発表では、この結果をもとに中上級の発話指導について提言を行う。

### 「南米日系社会における子どもの日本語教育の現状：現場の声を中心に」(Japanese language education in the Japanese community in South America : From the local teacher's perspective)

Eriko Nakajima, The Japan Foundation, San Paolo

北米から南米にかけて日系人が多く在住するアメリカ全域の日本語教育の基盤には、日本人子弟の国語教育にあるが、移住から100年以上経過した現在、各国での日本語教育は変容を遂げている。しかし特に南米においては、日本語教育を包括的に捉えた調査は少なく、現状を知るのには容易ではない。また南米の中では日系社会における年少者の日本語教育を総称して「継承語教育」と呼ぶことが多いが、日系社会の現状は多様で同じとは言えない(平岩, 2011)。そこで本発表では、国際交流基金サンパウロ日本文化センターが、4年前より南米スペイン語圏への日本語教育支援を拡充して収集した情報をもとに「移住の経緯：移住の時期、集団移住の有無」、「日系コミュニティの形態：都市部／地方、コミュニティの規模」、「日本語機関：公教育校／語学学校、日本政府からの支援」の観点から、年少者の日本語教育の現状を概観し分類する。また1990年以降、南米における日系社会の日本語教育を「継承語教育」としてバイリンガル教育の文脈からとらえる動きがみられたが、この枠組みには当てはまらない現場では近年「外国語教育」を目指す動きも出ている。このことから、同機関が南米日本語教育実態調査の予備調査として実施したインタビュー及びアンケート調査から、南米の日本語教育機関が、年少者への日本語教育をどのように捉えているのか、また日本語教育を通してどのような人材育成を目指しているのかについて、まとめた内容を報告する。これらを提示することで、今後の南米における年少者の日本語教育支援の方向性を示唆したい。

## SESSION 1-D: PEDAGOGY PANEL [ RIVERWAY ROOM ]

Chair: Masami Ikeda, Massachusetts Institute of Technology

### Panel Title: 「独学経験者の混在する日本語クラスの現状」(What Is Happening in Japanese Classes Now with Increasing Numbers of Self-Taught Learners?)

情報通信技術の進展により日本語習得手段が多様化し、独学で日本語を習得する学習者が増える中、大学のクラスに編入する独学経験者も増加している。様々な媒体を駆使し、独学のみで相当なレベルに到達することが可能な時代に、なぜ授業に参加しようと思うのか。発表者らはこれまでの研究で、急増する独学者の学習背景や学習法の解明、独学経験者を含むクラスでの授業実践、独学経験者の心理面の調査などを報告する傍ら、独学者混在クラスの課題について、ラウンドテーブルなどにて様々な教育機関の日本語教師間での意見交換の機会を設けてきた（池田・池田 2018）。本パネルではこれらを踏まえ、日本語独学経験者が混在するクラスの状況・課題・取り組みを報告し、今後の日本語教室のあり方、また教師の役割について考察する。発表1では、ゼロ初級クラスにおける独学経験者の履修状況と彼らの存在が未習者の学習動機に及ぼす影響について、実証データを基に分析し、学習環境設計について述べる。発表2では、大学の上級レベルに編入した独学経験者へのインタビュー結果から、独学者混在クラスにおける教室デザインの課題と教師の役割、そして今後の可能性について論じる。発表3では、高校のオンラインコースに参加する独学経験者の現状をインタビュー調査結果から明らかにし、オンラインコースが彼らの日本語学習において果たす役割とその課題について考える。発表4では、独学経験者を含む学習者間のレベル差が比較的大きいクラス（初級後半から初中級レベル）において授業の一環として取り入れたセルフスタディの実践報告を行い、学習者オートノミーの視点から考察を行う。

### 「ゼロ初級コースにおける独学経験者の存在が未習者の情意面に及ぼす影響」 (Examining the influence of self-taught learners on complete beginners in an elementary Japanese course) Masami Ikeda, Massachusetts Institute of Technology

大学の日本語コース履修者の学習背景の多様化が進み、個々の学習環境を的確に捉えることが年々困難になっている。独学経験者が急増する中、発表者はこれまでに独学者の実態調査や独学成功者の学習法導入の試みなどを行ってきたが、これらはいずれも独学で中上級レベルに達した編入者に焦点を当てた取り組みであった。プレイスメントテストが課せられない日本語ゼロ初級コースにおいては、開始時の履修者間の日本語レベルや知識の差が顕著でありながらも独学経験者の存在が把握しにくいという実情があったが、2019年秋学期のゼロ初級コースにて、コース開始前のアンケート調査に独学経験に関する設問を加え、全履修者から回答を得た。その結果、履修者の多様な学習環境が明らかになると同時に、初級コース特有の課題も見えてきた。中でもコースを途中で辞めたのが全くの初心者のみで、そのほとんどがコース開始後二週間以内で辞めているという現象からは、独学経験者を含む既習者の存在によって未習者が学習の初期段階で「自己能力の認知に伴う無力感」（岩本2010）に陥り、日本語学習に適應する前に辞めてしまうのではないかという懸念が顕在化した。

本発表では、独学者混在初級コースにて、学習開始直後の未習者が直面する学習動機減退の要因を学習者の情意面 (Dornyei 2001) から捉え、彼らの第二言語不安を軽減し学習継続を促すために教師が行えることは何か、検討する。学習環境の多様化が急速に進む中、今後ゼロ初級コースの履修者の大多数が独学経験者となる可能性は想像に難しくなく、その環境で未習者が学習動機を維持できるような学習環境の設計には何が必要か、実証データや追跡調査の結果を含めて考察したい。

### 「独学者混在の日本語上級コース「日本のポップカルチャー」から ーコースデザイン・教師の役割と課題点を考えるー」 (Learning “Japanese pop culture” with self-taught learners: Teachers’ roles and curriculum design) Naoko Sourial, The New School

本大学の日本語の教室でも独学経験者がよく見られる。独学経験者は通常初級レベルのクラスに混在していることが多いのだが、2019年春学期に本校の日本語上級クラスでは、二人の独学経験者が登録していた。この内の一人、ジュン（仮名）は本やオンラインのゲームなどを使い、独学のみで上級レベルまで達した学生で、卒業前の最後の学期に、自分の大学の提携校である本校で日本語上級クラスがあることを知り、日本語のクラスに初めて参加した。本発表では、独学経験者に対してだけでなく、多様なバックグラウンドを持つ学生も混在する上級レベルのクラスで、インクルーシブな教室活動として教師に何ができるのか、カリキュラムデザインについて述べ、そしてジュンへのインタビューやジュンがディスカッションリーダーをした際のクラスディスカッション、授業後の感想等の具体例を挙げ、教室活動について報告する。本コース「日本のポップカルチャー」は、「日本のポップカルチャー」というテーマを通して、日本語を教えるCBIのコースであり、言語活動・協働学習を通し、クリティカルに考え、分析すること（佐藤他2015）が要求される。本コース終了後の感想として、ジュンは「日本語でクラスメートとディスカッションしたり、深く考え、書いたりすることで、今までとは全く違う日本語の学習ができた。でも、それは本コースの『リラックスした雰囲気』の中でこそ、自分も他者も自由に自己表現し、意見を共有できたのだろう」と語った。最後に、本実践活動や他の学生からの感想から、独学者混在のこうした日本語上級コースにおける教室デザインの課題・今後の可能性について論じる。

### 「オンラインコースから考察する高校生の独学の実態」 (From solitude to solidarity: High school students’ experience in self-teaching and in an online class) Ayako Anderson, Global Online Academy / Noble & Greenough School

高校生にオンライン授業を提供する本校には北米・中米・南米・アジア・中東・アフリカにある私立高校やインターナショナルスクールが約70校加盟している。初級日本語コースには、自分の通う学校に日本語プログラムがない高校生たちが例年40～50名ほど在籍しオンラインで日本語を学習している（レベル1・2・3、各レベル定員20名）。独学経験者（継承語話者を除く）はプレイスメントテストを受けてレベル2に入るケースが多く、その数は毎年平均2～3名である。レベル1履修者以上の単語・文法知識を備え日本語のみで会話できる生徒もいるが、その一方で、聞き取りや会話がまったくできず口頭試験で苦勞し、退学した生徒の例もある。オンラインメディアを通して独学して来た学習者が、なぜあえてオンラインコースを選択するのか。何を求めてオンラインコースに入るのか。独学のきっかけ、学習方法と期間、オンラインコースへの入学動機などについて、在籍中の生徒2名へのインタビューと卒業生2名への追跡インタビュー調査を行い結果を報告する。さらに、高校生の独学者が日本語の独学を通じて習得できるもの・習得困難なもの、オンラインコースがなせる役割と今後の課題について、調査結果をもとに考察する。

**「セルフスタディーを取り入れた日本語授業の試み ―自律性を育てる教室のあり方とは―」 (A practical report on the incorporation of self-study into a Japanese language course: How can students' autonomy be developed?)**  
Tomoko Ikeda, McGill University

本発表は、独学経験者が混在する大学の日本語クラスにセルフスタディーを導入した実践報告である。発表者はこれまで、独学経験者6名にインタビューを行い、彼らの学習動機や学習法、日本語授業から何を学んだかについて聞き取ってきた。インタビューからは、彼らが日本語クラスでは日本語のレベル差に関係なく、他者との相互行為によって学びを得ており、日本語クラスが自由に自己表現できる場、さらに自己実現につながる場となっていることがわかった。このことから、独学経験者を含むレベル差の大きい日本語クラスでも、教材や進度をそれぞれの学習者が選択でき、且つ他者との関係性を育み、お互いに承認し合える場を提供すれば、教室という場が個々の学習者の成長の場となり得るのではないかと考えた。そこで本実践では、各学習者が教材・進度を選択できるセルフスタディーをコースワークの一部として取り入れ、お互いの学習状況を共有する機会も設けた。具体的には、各自で漢字、文法、アニメなどのリソースを選択後、自ら立てた計画に沿って授業時間外に学習を進め、週間レポートを提出した。またクラスのウェブサイト内に設置した掲示板と、授業時間内に設けたディスカッションの時間を利用し、グループで各自のセルフスタディーの進捗状況について報告し合った。その結果、独学経験者を含むグループでは、彼らが他の学習者に与える影響が大きく、他のグループとは交流の度合いや学習の進度の面で違いが見られた。これらの要因をアンケートとインタビュー調査からも分析し、自らの学習を管理する能力の備わっている独学経験者から何を学べるか、学習者オートノミーの視点から考察する。

**SESSION 1-E: LINGUISTICS PAPERS [ ARNOLD ROOM ]**

Chair: Sooyun Park, Kobe University

**「日本語教育における「たくさん勉強してください」の使用をめぐる」 (On the usage of *takusan benkyo shitekudasai* in Japanese language teaching)**  
Sooyun Park, Kobe University

本発表では、日本語教育、とりわけ、初級の日本語教育の現場において教師がしばしば使用する「たくさん勉強してください」という表現の適切さについて考察する。

「たくさん」は、「量の副詞」（仁田2002）として、主体、対象、動作の量を限定する働きをする（例：駅前に人がたくさんいる／パンをたくさん焼いた／今日はいつもよりたくさん歩いた）。しかし、動作の量を示す「たくさん」の使用については、かかり先の動詞のタイプによっては、「違和感」があるとされるものがあり、その一つに「たくさん勉強する」を挙げることができる（市川2010）。本発表では、現代日本語における「たくさん」の使用実態（データは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）より収集）並びに、初級教科書（11種）における副詞の導入実態の分析結果に基づき、1) なぜ「たくさん勉強する」に「違和感」を覚えてしまうのか、2) 「違和感」があるにも関わらず、なぜ初級の日本語教育の現場では使用されてしまうのかについて論じる。まず、1) については、①動作の量を示す「たくさん」は非常に周知的な用法であること、②動作の量を示す「たくさん」が共起する他動詞には制約があり、「勉強する」、「考える」のように、必ずしもヲ格の名詞を伴わなくても意味が完結する他動詞とは用いられにくいからであるということを示す。次に、2) については、初級の日本語教科書では動作の質を規定する副詞の導入が乏しいことに起因するということを示す。

本考察結果を通して、語彙のコントロールにより実際の使用とは反する表現が産出され、それが学習者の産出物にも影響する可能性があるということを示したい。

**“Applying data science to Japanese linguistics: How do Japanese politicians talk?”**  
Koji Tanno, University of Kentucky

Data science provides tools to conduct linguistic analyses on large volumes of linguistic data at the scale of millions of words through a case study on changes in Japanese politicians' language over the last 60 years. What is adopted as research data is a body of spoken texts over 150 million characters available in the Japanese National Diet Minutes Corpus (JNDMC). Using the morphological analyzer Mecab, we were able to tag this huge body of texts mechanically by Python scripts. Form and content analysis were performed on the tagged texts and yielded the following results regarding the most prominent changes in form and content as revealed by the JNDMC corpus. With respect to change in linguistic forms, three major syntactic categories, i.e. verbs, adjectives, and nouns, were tracked over time. A significant change was found in the use of the humble verb *oru* 'exist'. While this verb was one of the most frequent verbs in the 1940s, its occurrence became scarce in the most recent decade,

suggesting a change in how politeness is expressed or perceived in formal language use. In terms of speech contents, certain keywords indicate shifts in the nation's interests. For instance, while words like *tsute* 'connection' and *seihu* 'government' had high currency immediately after the World War II, words like *anzen* 'safe' and *kokumin* 'citizen' gained popularity in recent decades, reflecting increased individualism in Japanese society.

### **"Gender representations in Japanese-as-a-foreign-language textbook dialogues"**

**Ayana Hatsuda**, University of Arizona

This study examines gender representations in mixed-sex dialogues in Japanese-as-a-foreign-language (JFL) materials, with a focus on the 'discourse roles' of male and female characters. Previous research on sexism in foreign language textbooks (English, Greek, and Russian) has reported that women are presented in a disadvantageous position compared to men in many cases, conforming to the stereotypical image of women as subordinate to men (Lee 2014; Porreca 1984; Poulou 1997; Rifkin 1998). However, the major focus of these studies has been on the textbook content itself (e.g., the characters' male to female ratio, occupational roles, personality), and not much on textbook dialogues and the 'discourse roles' that male/female characters play in them (Poulou, 1997). Since dialogues are made in such a way that learners can imitate them, learners, by practicing dialogues, may absorb any gender-associated biases either consciously or subconsciously. By comparing traditional textbooks with online resources, this study explores how gender is represented in terms of language functions. All the mixed-sex dialogues in two series of JFL textbooks widely used in Japanese language classes in the U.S. will be examined. Drawing on Poulou (1997), language functions will be divided into four categories: informational, phatic, directive and expressive. As comparative data, dialogues from an online resource for Japanese learners will also be analyzed, for traditional textbooks and newly developed online resources may reflect gender roles differently. The results suggest that, in both textbook and online dialogues, men tend to give information and women tend to ask for information, and that male characters tend to produce more utterances than female characters do.

### **「日本語学習と自発的にコミュニケーションを行う意思との関連」 (Japanese language learning and willingness to communicate)**

**Ikuko Okugawa**, Keio University

本研究は日本に留学している大学生を対象に彼らの日本語学習と自発的にコミュニケーションを行おうとする意思 (Willingness to Communicate) との関連を探ったものである。近年、若者の国際交流は世界的な潮流になっており、日本でも日本語学習を目的に来日する学習者の数が増加している。その中でも言語習得についてはある程度の蓄積がなされているが、日本語学習動機や日本語使用に対する不安、日本語使用の積極性が日本語能力とどのように関わるか等については、あまり研究が行われていないのが現状である。外国語学習の動機づけ研究ではGardner and Lambert (1959, 1972)の「統合的動機—道具的動機」という二分法が礎となっている。そこでは、その言語を話す人に好意的な態度を持っているかどうか、その文化に興味があるかないかが言語意欲に関係し、その結果、習得の度合いに影響するということが明らかになっている。また、移民先への同化に対し抵抗感が強いと学習意欲が低下することや (Clement (1986))、英語のように通常外国語の中でステイタスが高い言語ほど学習意欲を喚起しやすい点 (Giles, Bourhis, and Taylor (1977)) が指摘されている。本研究では、日本人の英語学習動機について調査をしたYashima (2002)を参考に、日本語学習者の「国際的志向性」を定義し、異文化有友好オリエンテーション、異文化間接近回避傾向、国際的職業・活動への関心、海外での出来事や国際問題への関心が日本語能力、日本語学習意欲と関連があることを示す。さらに、日本語学習者に日本語学習の楽しみを経験させるなど内発的動機を誘発することで学習意欲を高めることを提案する。

## **SESSION 1-F: LITERATURE PAPERS [ OLMSTED ROOM ]**

**Chair: Christina Laffin**, University of British Columbia

### **"What am I seeing?: Modernist descriptions in Kajii Motojirō"**

**Miyabi Goto**, University of Virginia

The development of modern Japanese literature was particularly marked by the drive to visualize the invisible in descriptive verbalism. The desire for recreating physical semblance, already present in discourses and practices during the Edo period, was further fueled by the prevalence of reproductive technologies such as photography in the Meiji period. As exemplified by Tsubouchi Shōyō's prescription for the novel that "makes seeable what is hard to be seen" (The Essence of the Novel, 1885–1886), the urge for mimetic description went beyond the surface of physical objects and trespassed on the internal realm of the human psyche. Resultantly, recent scholarship considered descriptions of interiority a distinct feature of Japan's literary modernity. The emphasis on interiority, however, may obscure important differences in what is being described. The object of descriptions varies not simply in visibility—the visible exterior or the invisible interior—but also in modes of seeing—the physical seeing or the mental seeing. Taking Kajii Motojirō's work for example, this paper investigates how mental seeing, such as imagining what does not physically exist in front of one's eyes, is described in conjunction with physical seeing of objects. Kajii's descriptions actively confuse these two modes of seeing, arousing anxiety in the text. I contend that such anxiety ensues, not because descriptions cannot make the invisible visible, but because descriptions disclose there is no distinction between the two modes; the mental seeing is the physical seeing. This paper thus contributes to a historico-literary perspective to the recent rise of work in visual studies.

### **"The anti-espionage novel and the fostering of wartime subjectivity in Imperial Japan, 1941-45"**

**Quillon Arkenstone**, Washington University in St. Louis

Maligned as a product of the modern period's 'barren' years, Japanese literature produced during the Pacific War is nevertheless recognized as having played an important role in the creation and maintenance of a wartime subjectivity. In Japan as elsewhere, writers were mobilized from both home and combat fronts to sell the public on the war; nowhere was this truer than with detective fiction, arguably the war's most popular genre. While recent scholarship has begun to offer a composite view of the genre and the activities of its preeminent figures in the modern period, works produced during the years 1941-45 continue to be given short shrift, a fact usually attributed to either postwar embarrassment or claims to inactivity on the part of their authors. My presentation addresses this gap by focusing on a sub-genre of detective fiction that was particularly active during the war, the anti-espionage, or spy, novel (*bōchō shōsetsu*). Through a discussion of Edogawa Ranpo's *Idainaru yume* (The great dream, 1943), a work that immerses readers in the subjective experience of participating in the war by alerting them to the dangers of Imperial power threatened by theft of technological secrets and sabotage, I portray a genre in crisis, as it attempts to reconcile the enlightenment thinking undergirding modern detective fiction with the sanguinary ethnic nationalism permeating the conflict. I argue that the resulting contradiction sees the anti-espionage novel as capable of reflecting the realities of a nation at war but incapable of explaining those realities, as it remained caught between its dependence on a rational modernity on one hand and on the other the pressure to collaborate with wartime authorities, whose own ideas concerning the utility of literature were being reoriented to function within the context of a very irrational Total War.

### **"Capitalist expansion and interstices of solidarity in Kuroshima Denji's *Militarized Streets*"**

**Edwin Michielsen**, University of Toronto

Following the Shōwa Financial Crisis in 1927 bringing down the Wakatsuki Administration, the ensuing cabinet under Prime Minister Tanaka Giichi was pressed to find a solution for the economic malaise. Among his solutions, Tanaka ordered several military expeditions, known as the Shandong Interventions (1927-1928), to ward off Chinese Guomindang troops deemed necessary to protect Japanese capital abroad and reinvigorate the domestic economy. In response to these events, the prolific proletarian writer Kuroshima Denji, known for his antiwar writings, visited the Shandong province to prepare his novella *Busō seru shigai* (Militarized Streets, 1930). In this paper, I shall start with a brief historical description of Kuroshima's trip to Shandong and the censorship surrounding the publication of his novella. Then, I shall turn to a discussion of Kuroshima's novella to illuminate how he articulated a class-based resistance between Chinese workers and Japanese soldiers. This paper will argue that Kuroshima, by taking the Shandong Interventions as his reference, attempted to elucidate the invasion of Japanese capital into China proper, to expose the cooperation between the Japanese state and capitalists, and to portray the burden imposed on Japanese soldiers and Chinese factory workers. Juxtaposing the broader historical context, Kuroshima created a space in his story where Chinese workers and Japanese soldiers could meet and communicate in each other's language. The exchange and visibility of struggles between the two groups made it possible to expose the intricate structures behind war as well as to imagine internationalist cooperation against war. In doing so, Chinese and Japanese proletarians tried to reconfigure the urban space of Jinan from a national warzone to a class one.

### **"High culture revisited: Studying "high" culture as resistance in the Age of Pop"**

**Gian-Piero Persiani**, University of Illinois, Urbana-Champaign

The field of Japanese Studies has undergone a Copernican revolution in the last decade or so. Formerly the jewel in the crown of overseas Japanese studies, so-called "high" genres such as waka, noh theater, and Neo-Confucian thought are now seen as niche, obscure, elitist, if not passé by publishers, grant-awarding institutions, and university hiring committees alike. By contrast, the once-ostracized contemporary popular culture is now everyone's darling. While desirable and beneficial in some respects, this sudden, almost frenetic shift to the new and the popular has created problems of its own which are no less threatening to the health of our field than our old obsession with the old and the "high." In this paper, I investigate the roots of our current fascination with the new, and take on the thankless job of pointing out some of its more insidious aspects. I also argue that more than to any inherent flaws, our current hostility toward the "high" is a reaction to the distorted view of it popularized by an earlier generation of scholars. Finally, I point out some surprising benefits of studying the old and the unpopular in this age of permanent, market-driven desire for the new. Without sliding into a Bloomian defense of the "Great Tradition," I conclude that a well-thought out balance of modern and pre-modern, "high" and "low," niche and popular, is what the field should pursue, if it values its autonomy and educational mission.

**10:20 a.m.-12:00 p.m. — Session 2**

### **SESSION 2-A: PEDAGOGY PANEL [ PUBLIC GARDEN ROOM ]**

*Chair:* **Satoru Ishikawa**, Boston University

**Panel Title:** 「これからの初級レベルにおける教育実践の可能性～近年の言語教育指導の視点から～」 (New Possibilities for Teaching Beginning Level Japanese - Based on Recent Developments in Foreign Language Teaching)

近年の言語教育においては、21st Century Skills やContent Based Instruction (CBI)などの内容重視型の外国語教育、最新のテクノロジーを使用した指導など、新たなガイドラインや指導法が注目を浴びている。しかし、初級レベルでは従来の文法・語彙の習得を基本としたカリキュラムが中心になっており（和泉元2005）、中上級レベルのようにそれ以上の指導法



や活動などを取り込みにくいという課題があるように思われる。一方で、学習者の興味・外国語習得の動機を高めることは多くの指摘するところであるが、初中級のレベルでは学習内容と学習者の知的レベルに大きな差があり、学習者の興味を十分に刺激していないという意見もある。(牛田2007) 知的レベルの差という意味では、中級より初級レベルの方が顕著であり、文法と語彙の制限も相まって21st Century Skillsで求められる批判的思考や創造力、情報のリテラシーなどに結びつける活動は限られているように見える。

外国語教育では、言語能力を伸ばすと共に異文化理解、批判的思考、創造力などを伸ばすことが重要であるが、特に初級ではそれらに結びつく活動は限られている。その理由としては、従来の文法・語彙を中心としたカリキュラムの影響が強いこと、知的レベルとのギャップが大きい点があげられる。その意味において、従来の初級で扱われている文法・語彙指導に加え、これまでとは違った21st Century SkillsやCBIからの視点を含めた様々な活動が必要になるだろう。このパネルでは、初級レベルの従来の文法・語彙を中心とした枠組みに加え、近年の言語教育の流れをいかに初級指導に反映させ、学習者の興味や学習目的を重視し、モチベーションを高めながら、言語習得を促せるかという点を実践報告も含め再考したい。

**「初級レベルの学習者への意識調査 - 学習者が日本語クラスに期待する内容、指導、言語以外の目標とは」  
(A survey of beginning learners: What learners expect from the Japanese language classroom in content, instruction, and goals)**

**Satoru Ishikawa and Myeongok Lee, Boston University**

現在の外国語教育では、北米ならナショナル・スタンダード、ヨーロッパならCEFRなどをもとにした到達目標を明示したカリキュラムでプログラムが組まれていることが多いだろう。それに加えグローバルな時代の人材育成を目指す21世紀型スキルなどを言語教育に取り込む必要性も叫ばれている(當作 2017)。その一方で、教授法も内容を重視したContent Based Instruction(CBI)やテクノロジーを利用した指導、多読、自律学習など日本語教育を取り巻く環境も大きく変化しており、これらの変化に合わせ、日本語教師にはカリキュラムの改善が求められている。

特に21世紀型スキルに含まれる批判的思考、創造性を伸ばす指導やCBIを使った学習者の知的興味を刺激する指導は日本語教育でも中上級レベルでは広く取り入れられつつある。しかし、初級ではまだそのような試みも少なく(栗山2009)、初級の学習者がこのような指導に対してどんな意識を持っているかという研究は、学習動機や学習ストラテジー等の研究ほどなされていないように思われる。学習者の指導法や教材に対する意識や信念は、直接学習者のモチベーションとも関係し、言語習得に大きく影響を与えると考えられる(Horwitz 1988)。そこで、日本語を第二外国語(JFL)とする初級レベルの学習者を対象に、日本語のクラスにおいて言語を超えて批判的思考、情報リテラシーなど学ぶこと、CBIを含めどのような教材を望んでいるか、日本語の授業に何を期待しているのかについて意識調査を行った。本発表では、その結果を踏まえ、今後の初級レベルのクラスにおいて、学習者がどのような期待を日本語クラスに抱いているのかを明らかにし、今後の初級カリキュラムの方向性について検討したい。

**「初級読解教材における「文化」再考」 (Revisiting “culture” in reading texts for beginners)**

**Kazuhiro Yonemoto, Tokyo Medical & Dental University**

本発表では日本語の初級読解教材における文化の捉え方、扱いに関する批判的考察の上に行った教育実践について報告し、学習者の反応をもとに本活動の意味と可能性について考察する。言語教育における文化に関しては、本質主義的文化観から脱却し、文化の多様性／流動性に対する理解の下、実践に取り入れる必要性が指摘されている(細川, 2002; Kramsch, 2014; Kubota, 2008)。ただ、初級教材の多くは、先行研究において指摘されているような固定的、単一的な文化観が根強く残っており、さらに、文章読解に焦点を当てた形式が、文化に関する規範的言説を覆い隠し、知識としての文化の教授に繋がっていることが窺われた。そこで本実践では、日本の大学で学ぶ留学生を対象に行った1)日本の著名人の個人的経験に焦点を当てた読解活動、2)学生自身が選んだ著名人についての同様の読解文の作成活動、3)学生が作成した読解文の読解活動という一連の流れを通し、学習者にどのような視点が育まれたのかを、発表者の授業記録とコース終了後のアンケート調査を通し質的に分析した。結果として、国や民族といったものに捉われない個人に対する視点、また個人の経験や考えと社会的、歴史的背景との関係への気づきがあったことが示唆された。さらに、読解文の内容理解を超えた個人の意見の表出、共有が観察された。このことから、教材を消費する教師の意識の重要性(Kubota, 2008)だけではなく、文化の捉え方、扱いに対する批判的な視点を初級教材へも反映させていくことの重要性を本実践で得られた具体例とともに指摘する。

**「初級からの発表実践 ～スキルと歴史・文化コンテツを結ぶ～」(Presentations at the Novice level: Connecting presentation skills and content)**

**Emi Yamanaka, Mariko Itoh Henstock, and Etsuko Okita Snyder, Boston University**

言語教育の中では、初級から上級に至るまでスピーチや研究発表等の口頭発表が言語能力やスキルの向上を目的として取り入れられている。コミュニケーションにはinterpretive, interpersonal, presentationalのモードがあるが、初級段階では文法や語彙を重視した旅行や家族等の日常生活についての話題が多く(和泉元他2005)、presentationalモードについては中級以降の研究発表等で指導が行われる場合が多いようだ。中級以降は内容を重視し始め、日本についての基礎知識(例歴史・社会状況)等、学習者にとり知的好奇心を満足させ得る内容を扱うが、初級の内容は学習者の知的レベル相応の内容ではないとする指摘がある(牛田2007)。又、初級の文法/会話中心の授業から、内容を重視した中級に移行する際に、学習者がその内容に戸惑いを覚えたり(高橋 2012)、研究発表を行う場合、日本語での研究発表経験がない学習者は、リソースの扱い方や発表の態度等、多くのことを一度に学ぶ必要が生じ、学習者・教師双方にとり負担になっているのが現状ではないか。発表や研究のスキルは日本語教育のみならず高等教育を受ける者には、必要不可欠な能力であり早い段階からの指導が望まれている(高屋敷2014)が、学習者の言語レベルに対応したタスクの考案は容易ではない。

そこで、初級クラスで簡易な口頭発表を行う際、学習者の知的興味を刺激し得る文化紹介に口頭発表の技術指導を結びつけるプロジェクトを行った。これは中級へのスムーズな移行を目指すと共に日本に関する基礎知識の紹介と文化理解を深めること、初級段階から口頭発表のスキルやリサーチの仕方を身につけることを目的としている。本発表では、その具体的な指導法と学習者から得た評価について報告を行う。

#### 「初級レベルでのARとVRの利用に関する提案」(Applications of AR and VR in beginning Japanese)

Kazumi Hatasa and Samet Badar, Purdue University

本発表ではAR (Augmented Reality 拡張現実)とVR( Virtual Reality仮想現実)の初級レベルでの試行から得られた知見を報告し、可能な利用方法を提案する。ARにはウィスコンシン大学で開発、維持されているARISを、VRにはOculus Go (VRヘッドセット)にWanderというアプリを使用した。(WanderはGoogle Street Viewのデータをパノラマ映像にして、ヘッドセットを通して臨場感を味わうアプリである。)

キャンパス内外にある「日本」を発見し投稿する「Find Japan on Campus」では、ARISのAR環境を利用し、音声ノートやビデオノートを残す活動を行った。この活動では同じゲーム内に他大学の学習者が参加すれば、大学間で競争でき、刺激し合えるだろう。また、大学や町の紹介を音声やビデオで作成する等の活動を行なった。

VR環境では、インターネット接続された複数のヘッドセットでWanderを起動すると、学生同士又は学生と教員が同じ場所にいる感覚を共有でき、ヘッドセットからの音声を使用し同じ景色を見ながらの会話が可能である。従って、参加者が出身地や旅行したことがある街などを案内したり、教員が日本国内の仮想ツアーをすることができる。場所は観光地に限らず、自由に選択できる。(例 震災の被害地など)

人数の制限、教室外活動の位置付け、評価など解決すべき問題もあるが、ARもVRも初級学習者の動機付けに大いに貢献できる可能性が高いので、これまでの枠にとらわれない創造的な使い方を模索していきたい。

### SESSION 2-B: SIG PANEL: JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES (JSP) [ THE FENS ROOM ]

Chair: Tomoko Takami, University of Pennsylvania

#### Panel Title: 「21世紀のビジネス日本語教育：現在と将来」(Business Japanese Education in the 21st Century: Present and Future)

米国の高等教育におけるビジネス日本語教育は、強い日本経済に支えられ、仕事・キャリアに興味がある学習者が増えた1980年代後半、いくつかの大学でビジネス日本語コースが開講され、始まった。それ以来、ビジネス日本語教育の分野は進化し、変化している。このパネルでは、まず、アメリカの3つの異なる地域の大学でのビジネス日本語をの最新の事例を報告する。最初の発表では、カリフォルニア州の大学における言語カリキュラム、ビジネス日本語カリキュラムの変更について、特に学生・教職員・コミュニティの期待・およびビジネス部門と政府からのニーズを考慮した構想を中心に紹介する。次の発表は、東海岸の大学での従来のビジネス日本語教育の意義を再検討し、あらたに21世紀型スキルの習得を目標に取り入れたビジネス日本語コースの実践例である。特に4つのC (Communication, Collaboration, Critical thinking & problem solving and Creative and Innovation)に着目した学習活動や学習者の学びの考察を述べる。3番目の発表では、日米の商品やサービスのローカライゼーションの例を挙げ、ミシガン州で見られる技術の進歩に伴う最近のビジネスニーズと関心の急速な変化に対応し、ビジネス日本語教育の変化の必要性に関する洞察を議論する。最後にビジネスと日本語教育の橋渡しのために精力的に活動しているディスカスントが、現在・将来に向けて鍵となるビジネス日本語の方向について議論する。

#### 「グローバル社会に対応できる B.S. B.A. (理科系、文化系)専攻学生の言語教育のカリキュラムの構築: コラボレーションと課題」(Collaborations and challenges: Designing curricular space for language education among B.S. and B.A. majors to meet the needs of a global society)

Yoshiko Saito-Abbott, California State University, Monterey Bay

Modern Language Association (2019)の調査データによると、アメリカにおける高等教育では日本語と韓国語の学習者数が2013年以降わずかに増えてはいるものの、外国語を学ぶ学生の総数が大幅に減少していることがあきらかになっている。更に外国語を必修としない大学が増えているという現状は益々グローバル化する社会における外国語教育の位置づけが懸念される。

当大学では外国語習得が大学の一般教育で履修すべき科目の一つとして、外国語の重要性は大学のミッション・ステートメントにも掲げられ、創立以来必修教科としてカリキュラムに取り組みれていた。しかし最近の一般教育一斉改正により、大学内で外国語教育の意義と必要性について活発に論議された。特にカリキュラムに余裕のないB.S.(理科系)学部ではグローバル能力が重要視されるものの、その能力を外国語教育以外の教科で補うという意見も強く支持された。その中で、理科系、文化系の学生の言語教育への意識調査を反映し、21世紀スキルの習得を目標に取り入れた新たな言語教育を学生・教職員・コミュニティの支持と協力、およびビジネス部門と政府からのニーズを考慮したカリキュラムを構築した。

本発表ではこの実践例を基に21世紀における外国語教育のあり方、またその位置付け、言語カリキュラム、ビジネス日本語カリキュラムに求められる課題そして将来の方向を議論する。

#### 「21世紀型スキルを取り入れた中級ビジネス日本語教育実践」(Intermediate Business Japanese incorporating 21st century skills)

Tomoko Takami, University of Pennsylvania

本発表では米国のビジネス日本語教育の歴史、また過去20年の自身のビジネス日本語教育実践をふりかえり、学習者の就職活動のサポートを目標とするビジネス日本語教育の意義を再検討し、あらたに21世紀型スキルの習得を目標に取り入れたビジネス日本語教育の意義・実践を議論する。

1980年代後半から強い日本経済に支えられ、仕事・キャリアに興味がある学習者が増え、米国でもビジネス日本語コースが始まった。しかし、日本経済が低迷すると、仕事に対する興味を持つ学習者も減り、ビジネス日本語への興味が減少したと言われる。現在でも地元日系企業が多い地域を除くと、米国の大学生にとって日本語学習が直接就職の機会に結びつく可能性が高いとは言えない。そのような現状を踏まえて、21世紀型スキルを取り入れた、グローバルな人材を育成することに目標をおいたものに転換して行く必要性を述べる。そして、その実践例として、21世紀型スキルの4つのC (Communication, Collaboration, Critical thinking & problem solving, and Creative and Innovation) に注目してとり入れた、中級ビジネス日本語教育のカリキュラム開発・実践を紹介する。日本のビジネス文化や慣例をただ学ぶだけではなく、その文化背景をクリティカルに考え、異文化コミュニケーションの問題として考えるタスク、社会・文化を分析し、最終的には自分自身が作成する「広告プロジェクト」など、そのタスクやプロジェクトの概要を学生の学びについての考察とともに紹介したい。

### 「デジタル時代のビジネスの日本語教育」 (Business Japanese language education in a digital world)

Motoko Tabuse, Eastern Michigan University

テクノロジーは益々スピードを上げて進化しており、人工知能搭載の音声翻訳機が日常生活に侵入している。タクシーでは、多言語表示ができるタブレット機のみではなく、会話形式の相互コミュニケーションもできるようになった。また様々な国を訪れる日本人旅行者の間で人気の小型の音声翻訳機は2019年3月にシェア95.8%までにおどりあがった。ボタンを押して話すだけで、日本語と75の外国語の両方向の翻訳が可能になった。

一方、教育関係者は急速なテクノロジーの変化を、諸手を挙げて受け入れているわけではない。2012年に行われたデューク大学での調査(発表は2013年)では71%の学生が外国語の学習に機械翻訳機を使用しているのに対し、76%の言語教員が機械翻訳に反対をしていた。当時より機械翻訳の正確さは著しく向上し、機械翻訳と人間翻訳の違いがあまり分からなくなってきたが、言語教育の現場では機械翻訳機や携帯電話を禁止しているところも多いのではないだろうか。

日系企業が500以上あるミシガンにおいても、本社が人工知能を搭載した翻訳サービスを使い始めたことにより、これからの仕事がどのように変化するのか懸念している翻訳・通訳者もいる。日系企業に就職する卒業生の多くが、就職先の企業で翻訳や通訳の仕事も兼ねている中、最新テクノロジーと日本語学習の効率的な共存とはどんな授業形態なのだろうか。機械翻訳の性能と人工知能搭載のビジネスシステムを提示し、ローカライゼーションの例を提示しながら、これからのビジネス教育がどのように変化しなければならないかを話し合う。

### Discussant

Hideki Hara, Japan Foundation, Los Angeles

## SESSION 2-C: SIG PAPERS (STUDY ABROAD; ASSESSMENT; AP JAPANESE) [ JAMAICA POND ROOM ]

Chair: Fumi Yamakawa, Toyo University

### 「受け入れ校と送り出し校の連携に向けて：送り出し校の日本語教員の視点から」 (How can the 'host' and 'home' universities collaborate? : From the home-universities' perspectives)

Tomomi Sakuragi, International Christian University; Hiroko Sugawara, University of California, Santa Barbara

日本語を学ぶ学生にとって日本への留学はその後の人生を変える可能性のある大きな挑戦である。「留学決意・留学生生活・所属校への復帰」の各プロセスが学生にとって初めての経験であり、留学への期待を膨らませる一方で、様々な不安や困難に直面することは避けられない。送り出し校の日本語教員には、留学に関する各プロセスで、学生から多くの問い合わせや相談が寄せられる。しかし、そのような学生の不安や問題点が、大勢の留学生に対応する受け入れ校側からは見えにくいのが現状である。送り出し校と受け入れ校の日本語教員が情報を共有し連携することで、学生の不安や困難を解消し、彼らの留学生生活をより充実したものにするのではないだろうか。

本研究の目的は、日本語教員、留学を経験した学生からの意見をもとに、日本国内・国外の大学での日本語教育の連携の可能性を検討することである。今回は日本国外の大学機関の日本語教員の視点にフォーカスし、オンラインでのアンケート調査を実施した。

アンケートの質問(計16問)は大きく以下の4点に分類できる:(1)日本国外の日本語学習者の学習環境の現状と運用機会増加の工夫;(2)留学前の学習者の変化や学習者が抱える留学に対する不安;(3)留学後の学習者の変化;(4)受け入れ校と送り出し校の連携の実際とアイデア。

現在までに得た回答では、多くの日本語教員が日本国外での日本語学習や日本留学のサポートのために教室内外で様々な工夫をしている実態、学習者が抱える不安、留学受け入れ校との連携強化に向けた現場からの具体的な提案が得られた。発表では調査の結果をできる限り共有し、今後の日本国内・国外の日本語教育の連携強化に向けて議論を深めたい。

### 「日本語教員の評価のずれ：内容面の評価に関する予備的研究」 (The deviation of Japanese teachers: A preliminary study on content assessment scoring)

Marie Adachi, Kwansei Gakuin University

本研究は、日本の大学での日本語ライティング評価研究において、教員間の「評価のずれ」を減らし、可能な限り評価の統一に近づけることを目的としている。そのため、先行研究である坪根・田中(2015)、伊集院(2017)、脇田(2016)等、19本の文献レビューを行い(安達、2019)、次の2点に着目した。

1点目は、評価の高い評価観点は言語（日本語）面よりも「内容面・構成面」であったという点、2点目は、「評価のずれ」は必ず起こり、ずれが大きかったのは「内容面」という点であった。中でも「内容面」に関しては共通した評価観点がなく、評価のずれに関する研究成果は、未だ不十分であることがわかった。そこで本研究では、「日本語教員の内容面の評価はどのようにずれるのか」を考察する。そのための対応策として、評価ツール「ループリック」を採用・作成した。

そして、内容面の評価観点を「一貫性（Consistency）」と「独自性（Originality）」と定め、予備的研究として以下の調査・分析を行った。調査方法として、まず、作文データの収集を「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language (IJAS)）」より11編使用した。そして、作文のテーマは、「ファーストフードと家庭料理」とした。続いて、ループリックによる評定を日本語教育歴が8年以上あり、日本の大学で作文教育の経験のある日本語教員13名に依頼した。評定は2019年10月にウェブ上で実施した。

分析方法として、評価者のループリックによって出された評定（数値）を、標準偏差およびk係数で表し、評価のばらつきと一致度を確認する。さらに、そこから得られた結果より、本調査に向けた課題について考察する。

### 「短期留学生の経験的学びを支えるために」(Supporting and enhancing the experiential learning of exchange students during study abroad in Japan)

Fumi Yamakawa, Toyo University

本発表では、日本で日本語を学ぶ短期留学生の経験的学びを支えるための授業の実践報告を行う。

近年、日本の多くの大学では「国際化」が大きく叫ばれている。その国際化の一つの手段として受入れ留学プログラムが推進されており、特に短期留学生の受け入れは急速に広まってきている。

そのような背景から、短期留学生が限られた滞在期間でできるだけ多くの経験をし、それを単なる経験で終わらせず、学びへと結びつけるためには、それをサポートする必要があると考える。なぜならば、学びというものは経験をしたからといって生起するものではなく、その経験のreflectionを通して初めて生起するものだからである（Dewey, 1933）。したがって、もし彼らの経験を学びに結びつけるサポートがなければ、ただ日本に来て日本文化を経験したという感覚だけで、学びの実感がないまま帰国してしまう可能性がある。

そこで、筆者は「Japanese Culture and Society」という担当授業を短期留学生の経験的学びのサポートとして位置付け、「経験的学習理論（Experiential Learning Theory）」（Kolb, 1984）を授業の理論的枠組みとして使用し授業を実施した。その結果、短期留学生は特に「振り返りペーパー（reflective papers）」を書くことで自分の経験を客観的に分析することができ、多様な学びの気づきへと結びついていることが明らかになった。発表では、その授業の実践報告をし、短期留学生の経験的学びを促進するための教師の役割や留学プログラムのあり方について考察する。

### “Using the Japanese Language and Culture AP Exam as a Diagnostic for University-level Proficiency)

Carlos Pimentel, Western Michigan University; Fang Ji, The College Board

The Japanese Language and Culture Advanced Placement (AP) exam was launched in 2007, and is taken by an average of 2400 participants worldwide each year. The exam content is designed to be comparable to 300 hours (approximately 2 years) of instruction at the college/university level. However, this comparison naturally begs the question: how do college/university students who have studied for a comparable amount of time actually perform on the exam? In this session, the presenters will discuss the exam results of the 2016 released exam taken by 12 college students at a large midwestern university. The students were divided into two groups: 6 that studied Japanese for up to 300 hours, and 6 that studied for more than 300 hours. Using the results as a diagnostic, the presenters will discuss the structure of the exam, the difficulty level, the pace of Japanese instruction at the college/university level, the variability in AP credit allotment across colleges/universities, and the implications for post-secondary Japanese curricula. The presenters will also provide information about the professional development opportunities that help instructors gain familiarity with AP Exam assessment. Finally, session participants will also learn about ways to participate in the annual AP Reading.

## SESSION 2-D: PEDAGOGY PANEL [ RIVERWAY ROOM ]

Chair: Shigeru Osuka, Seton Hall University

**Panel Title:** 「Critical Content Based Instruction (CCBI) の視点から平和というテーマで日本語教育を「考える」」(Looking Ahead to the Future of Japanese Language Education for PEACE Through Critical Content Based Instruction (CCBI))

世界各地でナショナリズム、自国第一主義 (Patriotism)、環境破壊等の国際社会の共通の課題が台頭し、今まで私たちが理想としてきたはずの、共生や共存を目的とした平和社会の構築とはかけ離れてきている現状が窺える。このような国際社会の中で、日本語教育や日本語教師として何が出来るのであろうか。本パネルでは、平和教育というテーマでCritical Content Based Instruction (CCBI)を使用して、平和理念の確認、日本語教材の問題点、高校・大学での実践報告を通して、これからの日本語教育の国際社会での関わりとその可能性について考察したい。CCBIとはContent Based Instruction (CBI)にCritical Thinkingを用いて専門分野での言語を習得しながら、グローバルな視点で考えられる学習者を育成する事を目的としている。(Kubota 2016, Sato 2016) 先ず、第一発表者は、平和理論を通して、人間と社会を結びつけるエンパワメント (empowerment) としての日本語カリキュラムがどのように構築できるかを考察する。次に、第二発表者は国語教科書1ー3年生用とアメリカの高校・大学で一般的に使用されている4つの日本語教科書の内容を比較し、日本語教材の問題点を検討する。更に、学習者に「平和」についてのアンケート調査した結果を基に、学習者の視点からの日本語カリキュラムについても考察をする。そして、第三発表者は、高校でのCCBIの効果と課題、サマープログラムで学習者が広島の実地体験

ムを訪れた際の体験学習のアンケート調査の結果を踏まえ、高校での平和教育についての実践報告をする。最後に、第四発表者は、日韓の歴史問題に触れながら、大学日本語中級レベルでOral History Metadata Synchronizerを使用し、戦争の記憶インタビューのメタデータを作成し、生涯を通して日本語学習を続けることの意義について実践報告をする。

**「日本語教育の平和貢献への考察」 (How can Japanese language education contribute to peace education?)**  
**Yoshitomo Yamashita, Arizona State University**

本発表では、日本語教育を人間性教育 (Humanity Education) の一部として捉え、平和理論から人間と社会を結びつけるエンパワメント (empowerment) としての日本語カリキュラムの可能性について考察したい。これまでの日本語教育から平和教育への主な研究は、政治的・歴史的な関わりからの実践報告が主にされている (Kamiyoshi, 2018; Ichishima, 2018; Okuno, 2018)。しかし、これらはGaltung (1988) の消極的平和と積極的平和と能動的平和の分類からすると、消極的平和の視点に立っていた。消極的平和とは戦争、直接的暴力の不在な状態、積極的平和は意識的な差別や抑圧などが引き金となる直接的暴力を引き起こす構造的暴力の無い状態とされ、人間の日常からの精神的な動きを重視している。更に、能動的平和とは、不断の努力と活力をエンパワメントして、人々の動意識の中で醸成、構築される状態である。本発表では、この能動的平和の視点から平和教育の可能性についての言語政策モデルを提示したい。具体的には、Ruiz (1984) の“Language Orientations”のモデルで、第一に言語は差別や抑圧などを引き起こす道具になることが問題点であり、第二に言語使用は人間の権利とみなし、第三に、言語は使用者とそれに関する文化を含めた資源であり、異文化問題を乗り越えと同時に、経済的・社会的にも貢献できるという考え方である。感情的主体者としての一個人から、言語をエンパワメントとして使用できる人間の可能性に期待を持ち、日本語教育も人類が抱えている諸問題や戦争等の紛争解決にも貢献できると思われる。そこで、CCBIを使用し、日本語学習者の専門性と興味を考慮しながら平和教育について日本語クラスで行った実践報告を通して、日本語教育の平和貢献の可能性について考察をしてみたい。

**「国語教科書と日本語教科書の内容比較から見た平和教育への一考察」 (A study of peace curriculum: Content comparison between *kokugo* and Japanese language textbooks)**  
**Shigeru Osuka, Seton Hall University**

戦後の日本語教育が語彙や文型とその用法・機能を教えることを目的として位置づけられ、70-80年代の日本語学習者の急増への対応として生まれた画一的な教材化がきわめて表層的な日本語教育を生み、同時にいわば「考えない」学習者や教師を育て、80年代以降はコミュニケーション能力の育成が課題とされつつも、「何を」から「どのように」へという変更をもたらした。「内容」そのものの検討からは遠ざかり、「考えない教師」を育成しているという指摘がある。(細川、2010) 本発表では、国語教科書1-3年生用とアメリカの高校・大学で一般的に使用されている4つの日本語教科書 (初級・中級用) の内容を比較検討した結果を発表したい。「共生・共存・平和」というテーマで内容を比較すると、日本語教科書では、「何を」という内容が語彙、ストーリー、そして、その応用練習には余り扱われていない現状が判明した。日本語学習者はすでに母語によって思考する力はあるのだから、第2言語としての日本語教育では、言語形式とその用法・機能を教えれば良いとする意見や、平和等のコンセプトは、第2言語教育において学習者に求める必要は無いという意見等もあるが、「共生・共存・平和」のテーマで初級・中級学習者が日本語による学習活動を通して自律的に「考える・理解できる・使える」教育は、更なるグローバル社会化を考慮すると重要だと思われる。CCBIの視点から日本語教科書の内容の画一化の問題点を考える時期だと思われる。最後に、日本語学習者との言語学習者に「平和」を第二言語学習に含ませる事についてのアンケート調査をしたので、その結果も考慮し将来の日本語カリキュラムを考察したい。

**「平和社会構築への高校日本語教育の実践研究」 (A study of high school Japanese language curriculum for a peaceful global society)**  
**Kayoko Tazawa, Phillips Exeter Academy**

本学の外国語学部のミッション・ステートメントに「言語習得を通して、コミュニケーション能力、文学作品の理解、そして、各国の文化的基準をこえた多様化社会とグローバルな世界への準備」がある。授業では、可能な限り日本語でディスカッションをし、日本文化の理解とそれを越えた人間性についても理解することを目標に進めている。本学は高校であるが、10カ国の言語プログラムがあり、どの言語でも副教材として、1年目から様々な物語を学習言語で読み、人類の共存と人間性について考える機会を与えている。学習者はディスカッションを通して、物語の教訓を探り、日本的な考え方や価値感、それと世界の中での共存について考え、意見を述べる練習をしている。本学ではハークネス・メソッドという教育法を採用し、教師はあえて答えず、学習者の意見を阻害しないようにしている。日本語プログラムではCCBIをカリキュラムに組み入れて、初級では「猿蟹合戦」「舌切りすずめ」等の童話、中級では「かぐや姫」「鼻」「蜘蛛の糸」等の短編小説を、そして上級では、金子みすず、村上春樹の作品など文学作品を読む機会を設けている。また、2017年夏からサマープログラムで広島を訪れてから、「平和と戦争」についてのトピックを含め、初めに「火垂の墓」や「この世界の片隅に」等の映画を鑑賞してから、文学作品を日本語で読むようにしている。学習者たちは、アメリカで原爆について習っていたことと、広島で体験した現実のギャップにショックを受けていた。本研究では、学習者に「戦争と平和」のテーマと広島訪問についてアンケート調査を実施したので、そのデータをもとに今後の課題についても検討をしてみたい。

**「平和の理解を深めるための中級日本語の実践研究：戦争の記憶のメタデータ作りを通して」 (Deepen the understanding of peace through intermediate Japanese courses: Creating meta-data of war memories)**  
**Noriko Sugimori and Masanori Shiomi, Kalamazoo College**

日本語教育を通して平和を目指すCCBIは、中級以下での実践研究はまだ少ない。1945年から戦後75年過ぎた現在でも、未だ長い「戦後」が続いており、日本との関連で平和を語る時、解決に程遠い慰安婦問題等を含む日韓の歴史問題に触れざるを得ない。この重要で難しい問題の理解を日本語学習を通して学習することを目的に、大学中級クラスの学習者とともに、戦時中、大日本帝国内に居住し、日本語を学んだ人に先の大戦の記憶についてインタビューを行った。また、韓国国内でのインタビュー結果もデジタル化してきた。本研究の発表者の一人は大学院修士課程で慰安婦問題について取り組んだ。ここでは、大学日本語中級クラスにおける慰安婦問題についてCCBIを用いた学習活動の研究成果について発表する。Kramsch (2019) は脱植民地化や平和を目指す言語教育において、立場の違う人々の認識プロセスを理解するための「文化の翻訳」が重要であると述べている。先ず、読み物教材をもとに慰安婦問題を話すのに必要な語彙や表現を学習する。次に、慰安婦問題に違った立場をとる新聞記事などを読み日本国内の意見との相違点を理解する。最後に、戦時中に日本語を話した二人の韓国人（慰安婦被害者と大学教授）のインタビューを分析する。このビデオは本研究者のグループがデジタル化したオンライン・ビデオである。慰安婦被害者らのビデオにはまだ日本語の要約などのメタデータ（背景情報）がついてないので、メタデータ作りは「文化の翻訳」に役立つと考え、Oral History Metadata Synchronizerを使ってメタデータを作成し、ビデオと同期化した。これらの研究活動を通してテクノロジーの限界や、生涯を通して外国語学習を続けることの意義についても考察してみたい。

**SESSION 2-E: LINGUISTICS AND PEDAGOGY PAPERS [ ARNOLD ROOM ]**

**Chair: Yan Wang, Carthage College**

**“Is it merely a hedge? The discourse-pragmatic stance-taking functions of *to omou* in Japanese conversations”**  
**Yan Wang, Carthage College**

*To omou* “I think” in Japanese is generally regarded as an epistemic marker expressing the speaker’s subjectivity (Iwasaki 1993, Moriyama 1992, Ono 2011). Recent studies (Takiura 2015, Hotta & Horie 2018) claim that it also conveys intersubjectivity in conversations for the speaker to minimize the impression of her/his involvement or commitment to avoid potential offense to the addressee. By examining *to omou* in native speakers’ casual conversations with Discourse Analysis, this study agrees that *to omou* often carries hedging functions to mitigate speech acts such as self-praise, negative evaluation, disagreement or showing knowledge/authority. However, some cases also lead us to question if *to omou* is always merely a hedge.

Researchers (Aijmer 1993, Kärkäinen 2003) recognize that “I think” in English, categorized as “tentative” and “deliberative,” paradoxically expresses both uncertainty and certainty, and can serve as “emphatic” or “boosting” devices besides hedges. Similarly, my study demonstrates that *to omou* also carries multi-faceted functions for interactional purposes: not only hedging a Face-threatening Act (Brown & Levinson 1987), but also reinsuring/reinforcing the speaker’s stance to confirm or support the addressee’s utterance, or deliberately hold the speaker’s non-compromised stance when disaligned from the addressee. In either case, *to omou* is more intersubjectivity-oriented rather than subjectivity-driven.

**“Stance building and the use of particle *shi* in interaction”**  
**Noriko Noma, University of Arizona**

Although particle *shi* is traditionally categorized as a connective particle, it is used at the end of an utterance without a “main” clause in conversation. Previous researchers have argued that this use of particle *shi* seems to work similarly to sentence-final, interactional particles, marking the speaker’s epistemic and/or affective stances (Sakakibara, 2008; McGloin & Konishi, 2010; Kondo, 2012). Nevertheless, the stances that particle *shi* marks do not seem to go hand in hand: it marks agreement as well as negative feeling and negative attitude of the speaker. Moreover, there is no sufficient literature discussing on the use of particle *shi* in conversation using Conversation Analytic method. By using the notion of “stance building” (Morita, 2015), this research aims to tease out the stance that the participants of the interaction construct through the turns with particle *shi*.

The research questions addressed in this study are: 1) In what conversational activities is particle *shi* used?; 2) Where in the sequence of turn-taking is particle *shi* used?; 3) How does the listener of the utterance with particle *shi* respond?; and 4) What are the stances that the participants build in the sequence of conversation that particle *shi* occurred?

In 21 audio-recorded naturally occurring conversations, 129 occurrences of particle *shi* were observed. From the analysis, it was found that particle *shi* is used in conversational activities related to information exchange (e.g., informing, updating) and activities related to negative feelings (e.g., complaining, troubles-telling). Moreover, the majority of occurrences of particle *shi* was in the expansion sequences of both first pair part and the second pair part. Furthermore, the stances of the participants were built through the use of various linguistic resources in the utterance, such as negative forms and particle *shi*; that is, particle *shi* is not a stance “marker” but a resource for stance “building.”

**“Stance-taking: JFL learners and benefactive verbs”**  
**Kumiko Takizawa, Ohio State University**

This study explores how JFL learners take a benefactive stance in Japanese. As Jaffe (2009) observes, stance-taking “plays a complex role with respect to the naturalization of social and linguistic ideologies and the social structures they legitimate.” The way in which language is used to take a stance always concerns the social context in which a speaker finds her/himself. In Japanese, benefactive verbs (*kureru*, *ageru*, *morau* and their honorific and humble equivalents) are indispensable stance indicators for showing gratitude or indebtedness. Such expressions do not really exist in English and their grammar is complex.

It is assumed that JFL learners will struggle with taking a benefactive stance using those expressions. In order to analyze JFL learners' stance-taking, data were collected from narrative interviews with ten JFL learners who are currently in 300- and 400-level university courses. In order to explore how learners attempt to show stance-reflecting benefaction, they were asked questions that aimed to elicit a speaker's feelings of gratitude. Some examples of such questions are, "Who do you appreciate the most in your life?" or "Who is the most generous person you know?"

The data show that (1) learners do use (or attempt to use) benefactive verbs to indicate stance, (2) they also fail to use benefactive verbs in contexts where they are called for, and (3) they misuse benefactive verbs, e.g., using *ageru* instead of *kureru*. Furthermore, it revealed that learners tend to show stance using evaluation such as adjectives, adverbs, or ritual expressions that show appreciation but they fail to utilize benefactive verbs. This failure to project a benefactive stance can lead to miscommunication and/or misunderstanding between learners and Japanese speakers. I offer possible ways to promote learners' awareness of the benefaction in Japanese culture.

### **"Vowel length perception by English learners of Japanese"**

**Machi Niiya**, International Christian University / Colorado College

Because Japanese is a mora-timed language, it can be challenging for speakers of languages with different timings to produce and perceive sounds that involve mora distinction. Among sounds contrasting with mora, this study aims to identify cues used by natives and non-natives when distinguishing the vowel length. A group of English-speaking Japanese learners and native Japanese speakers produced Japanese words forming minimal pairs with target vowels (V1) in context-free settings. Another group of English learners of Japanese and native speakers participated in perception tasks. The main findings are: 1) L2 listeners had a higher tendency to perceive short vowels, misperceiving long vowels as short, 2) when stimuli had clear differences in V1 absolute durations and duration ratios between short and long stimuli, both L2 and L1 listeners could perceive correctly, 3) when stimuli lacked differences in V1, both listener groups could not perceive, 4) when stimuli had differences in absolute durations but not in duration ratios, L1 listeners tended to experience difficulties, 5) when stimuli had differences in duration ratios but not in absolute durations, L2 listeners tended to misperceive, 6) when stimuli differences were unavailable in V1 but present in V2, both listener groups tended to perceive correctly, 7) when stimuli had differences in absolute durations and duration ratios but had significantly long V2, both L1 and L2 listeners tended to misperceive, and 8) when stimuli had differences in absolute durations and duration ratios but without whole word duration difference, L2 listeners had difficulty perceiving. These findings suggest that not only V1 but also V2 and word duration are important in identifying the vowel length as they do not only support but also damage the correct perception of both L1 and L2 listeners. Therefore, when Japanese is taught as L2, both extrinsic and intrinsic properties should be incorporated.

## **SESSION 2-F: LITERATURE PANEL [ OLMSTED ROOM ]**

*Chair: Linda Chance*, University of Pennsylvania

### **Panel Title: Moving Beyond: Medieval Exiles and Exilic Imaginaries**

Exile is typically conceived as a motion across space that enacts a separation—separation from sources of authority, stability, and meaning. For some medieval Japanese exiles, this was precisely the point: the advantage, as it were, of leaving the strictures of home and capital behind. Others strove to reconstitute an order, whether on and of those fresh horizons or in imitation of what they already knew. With these realignments of territory came new rhetorical and social possibilities that animated texts and traditions in each succeeding generation. This panel interrogates four such moments in order to deepen our thinking about exile and related conditions. Beth Carter dissects how Murasaki Shikibu deploys the concealment and destruction of letters from exile to Suma in *Genji monogatari* to narratively situate Genji during and after his travels. Turning to Kyushu and the world of the *Taiheiki*, Jeremy Sather focuses on Prince Kaneyoshi, son of Southern Court Emperor Go-Daigo, investigating how cosmological and sacerdotal power could be reenacted at a distance from the source. Taking up the commentator Ichijō Kaneyoshi's *Sayo no nezame*, Linda Chance asks how the disruptions of war morphed court valuation of the literary and material past. Laura Nuffer compares the swan-bride motif of China and Japan with a snake-groom story in *Amewakahiko no sōshi* to explore the ways in which gender inflects the exilic imaginary. Through these moves, the panel contributes to the robust reconsideration of exile and motion in medieval Japan. We do not assume that exile was gendered solely as emasculating for men or disempowering for women, nor do we predetermine centers or peripheries. Similarly, we are less interested in defining exile than in exploring the multiple ways that some versions of motion and alienation played out in texts and discourses that circulated in medieval contexts.

### **"Omissions, deletions, and partings: Burning secret poetic laments of exile to leave the world of *The Tale Of Genji*"**

**Beth Carter**, Case Western Reserve University

In *The Tale of Genji*'s famous "rainy night" scene, a young Tō no Chūjō attempts to read Genji's love letters, all the while knowing the best ones would not be left out for others to see. The motif of concealed correspondence between lovers resurfaces in both the "Suma" and "The Seer" chapters. During Genji's self-imposed banishment in "Suma," only one poem between Genji and Lady Murasaki is detailed. This is significant, as numerous examples of poetic laments of exile with others are recorded in the text. The omission is highlighted after Lady Murasaki's death in "The Seer," when the narrator reveals the existence of a "neat packet" of Lady Murasaki's letters from his "Suma years." Unable to bear having her memory outlive him, Genji has the packet burned. In this scene, the narrator stresses that others never saw the contents, save a "glimpse here and there." I argue that, just as Genji was able to re-enter and rise in the world at court with a public display of his most-treasured exile paintings, he prepares to leave the world with his private destruction of beloved poetic laments of exile. By concealing and deleting Genji's cherished notes, written during Genji's first period of separation from the world—his exile—Murasaki Shikibu

enhances the reader's understanding of Genji's actions and emotions, situates Genji's relationships within the tale and the broader social and political discourse of the period, and presages Genji's eventual dismissal from the world of the tale.

**"How the West was won: The role of royal authority in the subjugation of western Japan"**

**Jeremy Sather**, Illinois Wesleyan University

A single question lay at the heart of the Nanbokuchō Wars: would the emperor rule directly or would the office become merely symbolic, a cipher for legitimating warrior power? In contrast to the Ashikaga, who relied on the effective, if prosaic, means of securing alliances through land grants, Emperor Go-Daigo embarked on a more desperate gambit that involved inverting the very center-periphery dialectic that structured medieval Japanese life. By repositioning at the center those such as Kusunoki Masashige and the monk Monkan who existed at the margins, he would break warrior government that stood in the way of his hegemony. Conversely, Go-Daigo sent the center to the periphery in the form of imperial princes who would act as representatives of his sacerdotal authority, the goal being a recreation of what he thought was the emperor-centric cosmology of the Engi and Tenryaku years. Put another way, if Dharma is a wheel, then he would be its hub, his sons the spokes. One such prince was Kaneyoshi. Roughly seven at the time Go-Daigo made him seisei-taishōgun (Barbarian-Subduing General of the West) and sent him to Kyushu with the mission of subjugating the island and its obstreperous inhabitants, against all odds the boy survived to grow into a formidable leader in his own right. So formidable that his presence in Kyushu would beleaguer the Ashikaga long after Go-Daigo's death, eventually forcing them to send Imagawa Ryōshun, one of their most renowned generals, to deal with him. This paper interrogates Go Daigo's dream of uniting the realm under his royal authority through his son Kaneyoshi, whose life and times have much to say about the nature of exile and motion in fourteenth century Japan.

**"Ichijō Kaneyoshi's nights abroad and awake in the country of women"**

**Linda Chance**, University of Pennsylvania

Late in 1467, suffering the loss of his family library the Tōkabō to robbers, the regent Ichijō Kaneyoshi (1402-1481) fled to Nara, an involuntary exile from the fires of the Ōnin War (1467-1477) that ravaged the capital. Based upon his Sayo no nezame (Awake at night, 1473) we picture Kaneyoshi as a shivering mass of worries, unable to sleep; he takes consolation and finds strength in The Tale of Genji and the vision of female leadership in history, specifically in the forms of Amaterasu and Hōjō Masako. The essay, probably written at the behest of Hino Tomiko, wife of the shōgun Ashikaga Yoshimasa, instructed her son the new shōgun Ashikaga Yoshihisa in his duties via the unusual invocation of Japan as a place that should be ruled by women. As Kaneyoshi attempts in this and other works to recreate the authority of a tradition that was vested in centuries of paper and grounded institutions, he takes ever more stock of *yūsoku kojitsu*, the study of court customs and ceremonies as defined in the past, and looks to Murasaki Shikibu's text as his source and ally. I suggest that the lessons of mobility helped produce for him an unconventional notion of authority rooted in women's texts and practices. As author of numerous commentaries on Genji monogatari, Kaneyoshi bequeathed to later eras a standard of that classic not just as a touchstone for poetry and the emotions, but as textual ground for the court's authority.

**"Clipped wings and stolen skins: Amewakahiko no sōshi as a swan-bride tale"**

**Laura Nuffer**, Colby College

The folkloric motif of the swan bride is famously widespread, appearing in lore and literature around the world. The core narrative goes something like this: a shapeshifting bird-maiden is forced into earthly exile as the wife of the human man who steals her feathered robe, only to fly once she regains it. Variants of this tale have been told in Japan for over a millennium, with the first known versions appearing in provincial gazetteers (fudoki) from the eighth century.

On its surface, the fifteenth-century tale Amewakahiko no sōshi (The Tale of Amewakahiko) does not seem to bear any relation to the swan-bride motif; its heroine is not an earthbound bird-maiden but rather a human woman forced to wed to a giant snake. Fortunately, the snake transforms into a handsome man by removing his skin, which he stores in a box—but unfortunately, the couple is separated when his wife allows the box containing the snakeskin to be opened. She then sets out on a quest to retrieve her lost husband, overcoming various obstacles only to fail at the very end, leaving them stranded on opposite sides of the Milky Way. By comparing Amewakahiko to swan-bride tales from both Japan and China, I demonstrate that it inherits both their fundamental structure as well as a detailed sequence of motifs. (Crucially, in Japan and throughout East Asia, the swan-bride legend has long been hybridized with legends explaining the origin of the Milky Way.) The snake-groom of Amewakahiko is the male counterpart of the swan-bride, and the differences between the two are as instructive as the similarities; the changes made to the tale in altering the sex of the inhuman spouse suggest that the cultural imaginary of medieval Japan could sustain the concept of a captive wife but not of a captive husband.

**12:00 p.m.–1:00 p.m. — Lunch Break**

**1:00 p.m.–2:40 p.m. — Session 3**



## SESSION 3-A: PEDAGOGY PANEL [ PUBLIC GARDEN ROOM ]

Chair: Yuri Kumagai, Smith College

### Panel Title: 「「批判性」再考：「批判的」な教育に携わる教師に求められること」 (Rethinking “Criticality”: What Is Expected of Teachers Engaging in “Critical” Education)

昨今、批判的思考力を養うことを学校教育の目標に掲げることはごく当たり前になっている。ことばの教育の場においても、過去5年間の米国日本語教師会春季大会での発表要旨を概観すると、「批判性」「批判的」「クリティカルシンキング」といった文言を用いた論文が増えてきており、従来の言語スキルの育成のみをめざした教育に加え「批判性」を養うことの重要性が認識される傾向が見られる。しかし、「批判性」という用語が流行りのようにもてはやされる一方、その意味やあり方に関する議論はまだまだ萌芽状態にあると言える。

本パネルでは以上を鑑み、まず、教育現場からの「批判性」をめぐる考察を三つ発表する。一つ目は、米国大学の教員が日本の大学で行った授業で学内の言語景観を改革するという課題に対して「よそ者」であるのに「改革」を要求する教師側の姿勢に疑問をもった学生のインタビュー結果をもとに、教師・学生の立ち位置と社会改革という概念の関係性など、批判的教育学が孕む問題点について考察する。二つ目は、批判性育成を目的としたカリキュラムではなく、教師の授業での発言や振る舞いが学習者の批判性を養うためには重要だという視点から教師と学習者のやりとりを分析し議論する。三つ目は、日本の大学院で日本語教員養成を履修している学生が、実習活動を通して「批判的である」ことの意味を体感していく課程を分析する。最後の発表は、以上三つの報告での「批判性」の意味を振り返り、何をもって批判的な教育と呼べるのか、どうしたら学習者の批判性を養えるのか、その支援者である教師には何が求められるのかといった点に関する議論を通して、批判的教育のありかたを再考する。

### 「批判的教授法の社会改革の必然性という前提：教師と学生の認識の違いからの考察」 (The necessity of social transformation as the assumption of critical pedagogy: A case of the teacher-student gap in perception)

Neriko Musha Doerr, Ramapo College

批判的教授法 (critical pedagogy) は、学習者が自分自身の体験を社会の構造やイデオロギーを反映するものとして分析し、その理解をもとに社会を改革していくことを目指す (Giroux 1997)。本発表はこの社会改革という概念が前提とするもの、そしてそこに教師や学習者の立ち位置がいかに複雑に関わってくるかについて、民族誌的調査をもとに分析する。

発表者はアメリカの大学の教師だが、2018年春学期、日本の大学で現地の教授と共同で教育人類学の授業を行った。使用言語は英語で、留学生を含む日本語よりも英語の方が得意な学生が履修していた。本発表では、この授業の期末プロジェクトへの学生達の反応についての調査の結果を報告する。

プロジェクトの内容は大学構内の言語景観を分析し、それをもとに多くの学生が居心地がよいと感じる様にポスターを作って言語景観を改革するというものだった。ある学生はインタビューで、大学構内の状況をよく知らないのに「改革」することをプロジェクトの一部として要求するという発表者／教師側の姿勢に疑問を持ったという。その学生は、大学構内の店でアダルト本を売ることをやめさせようとした留学生に対しても、短期滞在の立場で日本の大学の状況を「改革」しようとした態度に同じ様な不満を持ったと言った。

本発表では、この調査結果をもとに、教師や学生の立ち位置がいかに社会改革という概念に関わってくるか（発表者は自分を「よそ者」とは位置づけていなかったが、学生は介入してくる「よそ者」と見ていたこと）、そして社会は常に改革されるべきであるという批判的教授法の前提を再考する。

### 「「批判的」実践としての教師のレスポンス」 (Teacher's unscripted response as a "critical" pedagogy practice)

Yuko Takahashi, University of Massachusetts, Amherst

フレイレの批判的教育学は、実践を通じた社会変革の促進を重要な目的としている。教師が「批判的」アクティビティを授業に取り入れる事はその実践の一つと考えられるが、それと同時に、教師は予期せぬ事態や何気ない会話の中で「批判的」なレスポンスができていくかを考えるべきではないだろうか。本発表ではそういったレスポンスを実践するために必要な「批判的」視点について考える。

批判的思考能力をめざす日本語教育では、カリキュラムやアクティビティを教師が事前に作成、準備し、授業に取り入れる事例が多く見られる。こういった事例では、アクティビティやプロジェクトを準備する段階で、どのようなトピックを選定するのか、「批判的」に議論を導くにはどうしたらいいかなど、教師が準備し考える時間がある。

本発表では、上記のように事前に時間をかけることができない事例、つまり準備・吟味された「批判性」ではなく、その場で求められる (unscriptedな) 「批判性」について考察する。分析するのはアメリカの大学の寮で行われた日本語授業における、教師と学生間のやりとりである。授業内のアクティビティの一つに、学生がトピックを決め話し合いを進めていくというものがあった。ある学生が選んだのは2015年のミス・ユニバースについてで、その日本代表のアイデンティティをめぐる、トピックを選んだ学生や教師が予期しなかった形で話し合いが進み、ある学生を傷つけてしまう結果となってしまった。この時どのように教師と学生の会話が進み、何が起きたのか、また事後的ではあるがその時考えられうる「批判的」視点とは何だったのかを分析する。

### 「「批判的であること」の考察：日本語教育実習生が抵抗や葛藤を乗り越えた先に見えてきたもの」 (On being critical: Student teachers' overcoming resistance against criticism)

Momoyo Shimazu, Kansai University

ことばの教育において学習者に批判性を持つことを求めるなら、それを支援する教師にも批判性が必要であろう。本発表では、教師が持つべき批判性のあり方を、日本の大学院の日本語教育実習生が教育実習を通して「批判的であること」を

経験していく過程から考える。考察の資料として、模擬授業後の実習生同士のディスカッションと、教育実習終了後の実習生へのインタビューを取り上げる。

模擬授業後のディスカッションでは、模擬授業を行った実習生が自己評価し、他の実習生もコメントを与える。そして教壇実習のために、検討すべき点を整理し、授業設計に反映させていく。このディスカッションを分析すると、他の実習生からのコメントに対する抵抗や葛藤が見えてくる。特に、自分とは異なる言語教育観など、ビリーフの違いが顕著になると、他の実習生のコメントを「個人的な非難」として捉えてしまう傾向が窺えた。しかし、この教育実習期間を通して、対話を重ねることによって「批判的であること」の意味を学んでいく様子も見てとれた。ディスカッションで「批判的であること」とは「他者の多様なビリーフを認めること」、そして「他者と異なるビリーフを示すのを恐れないこと」であるのを理解していくのがわかる。

このことは、実習生へのインタビューの分析でも明らかになった。全員で実習を成功させるという共通認識が芽生えたとき、他の実習生からのコメントが「非難」から「批評」へと変化し、たとえ異なる意見であっても認めることができるようになったという。最後に、このような「批判的であること」を体感することが、学習者の批判性を支援する教育を実践するための基盤となる可能性を指摘する。

### 「「批判性」再考：批判的なことば・文化の教育とは？」(Rethinking “criticality”: What is critical language education?)

Yuri Kumagai, Smith College

本発表では、本パネルの三つの実践報告で使われた「批判性」「批判的」という用語の意味することを整理することで、ことば・文化の教育における「批判性」とは何なのかを具体例と共に考察する。

過去5年間の日本語教師会春季大会の発表要旨を概観すると、「批判性」、「クリティカルシンキング」、「批判的な読み」といった用語を用いた論文が増えつつある。これは、従来の言語スキルの育成のみをめざした教育に加え、批判性を養うことの重要性が認識されつつあることの表れであろう。では、その批判性とは何を指しているのだろうか。久保田(2015)によると、応用言語学や教育学において「批判的」という用語は、応用・分析・統合・評価といった高次思考能力を指すものから、イデオロギー批判、さらには社会変革を射程に入れたものまで、幅広い解釈があるとしている。また、佐藤他(2015)は、自分たちの生きるコミュニティの未来を創造すべく既存の枠組みを見直し、必要に応じて変えていこうとする意識・視点・姿勢・態度を養うことこそが批判的なことばの教育の根底にあるべきであると議論している。

このように、「批判性」「批判的」という用語は、使う人によって様々な意味を指すため、何をもって批判的な教育と呼ぶのか、どうしたら学習者の批判性を伸ばせるのか、その批判性とは何なのか、その支援者である教師に求められるのはどんなことなのか、といった点についての活発な議論を行うことは批判的なことばの教育の現状を把握するために重要である。本発表は、批判的なことばの教育分野の今後に貢献すべく、現時点で「批判性」の意味やあり方を再考することで、今後の方向性についても示唆する。

## SESSION 3-B: PEDAGOGY PAPERS [ THE FENS ROOM ]

Chair: Junko Tokuda Simpson, California State University, San Diego

### “JFL learners’ interpretation of the language of manga: Investigating role language and visual vocabulary”

Noriko Yabuki-Soh, York University

Manga, one of the most influential mediums of Japanese popular culture, makes use of various devices besides conventional words and pictures. For instance, Teshigawara and Kinsui (2012) used the term “role language (*yakuwarigo*)” when observing that in Japanese fiction, specific sets of vocabulary and grammar are used in order to associate them with particular character types that are either assigned special roles or are minor characters that quickly appear and disappear. Cohn and Ehly (2016), on the other hand, employed the term “Japanese Visual Language” to explain a variety of graphic elements such as lines and sweat drops on characters’ faces, deformation and reduplication of body parts, as well as expository, patterned backgrounds. The interpretation of such features relies on the knowledge shared between the creator and the audience. The present study further examines the use of role language and visual vocabulary found in popular Japanese comics. Based on interview data, it also explores how these features are interpreted by Japanese language learners. The results show that role language is highly stereotypical and can sometimes be discriminatory, and that visual vocabulary is disseminated in different genres of manga. The quantitative analysis of the interview data indicates that Japanese language learners who often read manga do not necessarily have full knowledge of role language, whereas the accuracy of the learners’ interpretation of visual vocabulary is correlated with the amount of exposure to manga. The qualitative analysis suggests that learners are curious about the functions of these features. Pedagogically speaking, role language should be introduced into Japanese language teaching and learning with caution because it could promote the stereotyping of specific groups of people. At the same time, role language and visual vocabulary play significant roles in modern Japanese media, and appropriate understanding of them would be beneficial to Japanese language learners.

### 「原稿なしでも発表できる！知的書評合戦「ビブリオバトル」を通して育む、対話型プレゼンテーション力」(I can present without a script! Enhancing presentation skills through bibliobattle by communicating with the audience)

Junko Tokuda Simpson, University of California, San Diego

プレゼンテーションの目的とは単なる内容の伝達だけでなく、聞き手に必要な情報を分かりやすく伝え、説得し、最終的にある行動を起こさせることにある。就職や大学院進学を控えた学習者のために、プレゼンテーションスキルの向上を目

的とした活動を授業に取り入れることは、大変意義深い。21世紀型スキルやOECD教育2030においても、様々な知識、スキル、能力及び価値を習得することが将来を担う若者に要求されており、教科の枠を超えた総合的な能力が求められていることは明確だ。学習者の能動的な学びを引き出すアクティブ・ラーニングは、こうした総合的な能力の構築に効果的である。ビブリオバトルは5分間でお勧めの本を紹介し合うという学習者主体の活動であり、日本全国の小中高校、大学、図書館などで盛んに行われている(谷口他, 2014; 須藤・粕谷, 2016)。本発表ではビブリオバトルという活動が、プレゼンテーション力の向上だけでなく、学習者の思考力を深め、多様な考え方を導き出す活動としていかに効果的であるかを紹介する。また日本語学習者にとっては、好きな本を選んで読み、本に込められたメッセージや教えについてを考え、その本の魅力を聞き手との対話型プレゼンテーションを通して伝えるという一連の活動そのものが、総合的な日本語力の向上とも密接に関わっている。ビブリオバトルでは原稿を用意することはタブーとされるが、日本語学習者が聴衆を説得できるような発表を行うため、どのような指導を行うことができるのかは大きな課題である。本発表では上級クラスでの実践例を元に、ビブリオバトルを教室活動に取り入れることの意義や課題について考察する。

**「多読の音読スキルへの影響：黙読中心の多読から音読の流暢性は促進されるのか」(The effects of extensive reading on oral reading fluency: Does silent reading enhance fluency when reading aloud?)**

**Yuki Yoshimura, University of Massachusetts, Amherst**

本研究は米国における日本語学習者を対象に行う多読において、多読が音読スキルに与える影響について、多読授業を履修した学生の音読速度のデータを元に報告する。多読は、学習者が自分の言語レベルにあった本を独自のペースで、できるだけ多く読み進めていくことで効果が期待される学習法である(栗野他2012; Day & Bamford 1998)。オーディオブックの使用や読み聞かせも推奨されているが、本校を含め、米国で多読を実施している多くの機関では、リソースの問題もあり黙読が多いようである(瀬瀬 2015; 吉村・小林 2018)。全米の小学4年生を対象にした英語音読流暢性における研究では、授業内で行う音読よりも、授業外で自発的に行う読書のほうが音読流暢性に効果があることが指摘されている(Pinnel et al, 1995)。大人の日本語学習者にも類似した効果があるとなれば、学習者自らが選書して読む多読は、音読の向上に効果があると期待することができる。その効果を調べるため、多読授業の学期始めと学期末に、学習者に短い文章を読んでもらい、読み始めから読み終わりまでの時間を測り音読の速度を測った。学期始めのpre-testと学期末のpost-testをt検定で比較したところ、有意な差が確認でき、多読授業の一学期間を通して、音読の速度が速くなったことが明らかとなった。さらに宿題として提出させている読書記録のデータを併せた分析では、読書記録の数と音読時間の減少に有意な相関関係が見られ、より多くの本を読んでいる学習者のほうが、学期末の音読速度が速くなっていることを示唆する結果も得られた。発表では、これらの結果を元に、多読が言語学習に包括的に与える影響と今後の見通しについて言及する。

**「上級ライティングでのPeer Reviewの実践例」(How would peer review support advanced-level writing?: Examination of peer review process and learners' perceptions)**

**Sachiko Hiramatsu, Brown University**

この発表では、日本語上級のライティングの課題でPeer Review (またはPeer Assessment) を実施した試みについて報告する。このPeer ReviewはESL・EFLの分野で研究が進んでおり、これまでに学習者の満足感、スキルの向上度という点で効果があること(Xiao & Lucking, 2008)、また従来の教師によるフィードバックとの相関関係(Freeman, 1995; Pope 2005; Sullivan & Hall 1997, reported in Matsuno, 2009)も報告されている。しかし、Peer Reviewにはその実施方法にいろいろなバリエーションがあり、またESL/EFLの分野と日本語とどう異なるか、という点でまだ未知数の領域である。

上級のクラスで学習者にライティングを課すと、一つテーマは決まっても多様な学習者自身の興味や意識を反映して、書かれるトピックは非常に幅広いものである。それを「採点」するのは教師だが、このような内容で書かれた内容を「共有」することはできないか、またPeer Reviewを一つの言語学習の機会として活用できないか、という観点から本校では昨年度からPeer Reviewを実施している。このコースでは2回目の原稿が出た時点で三人程度のグループでお互いに書いたものを読み合い、その上で話し合うという形式を取り入れている。その際、コメントを教室内で直接会って与える場合と、オンラインで行う場合では学習者の認識や結果、また学習効果も異なると指摘されている(Saeed et al, 2018)。そのため、この報告ではこの二つの方法でPeer Reviewを実施し、その後アンケート調査だけではなく、Peer Reviewで与えられたフィードバックとその後書かれた清書の内容も分析した。ここでは実際の学習者間のインタラクションの例、学習者のReviewに対する意見、その効果(実際ライティングの向上に繋がったかどうか)という点について分析した結果を報告したいと思う。

**SESSION 3-C: LITERATURE AND CLASSICAL JAPANESE SIG PAPERS [ JAMAICA POND ROOM ]**

**Chair: Paul Warnick, Brigham Young University**

**“Confusion over Cathay: Attitudes to Chinese material in mediaeval Japanese poetic criticism”**

**Thomas McAuley, University of Sheffield**

The complex nature of premodern Japanese literary production, and Japanese writers' use of a continuum of scripts and languages, ranging from pure Japanese to pure Chinese, depending upon the genre, purpose and audience of their writing, is well known, however, little attention has yet been paid to the critical attitudes displayed by judges and participants to the use of Chinese material in the composition of waka poems presented for competitive consideration in uta'awase (poetry competitions). Thus, this paper will present preliminary conclusions from an ongoing research project investigating the early mediaeval poetry competition, Roppyakuban uta'awase ('Poetry Contest in 600 Rounds', 1193-94) and the conflicting critical attitudes to material of Chinese origin expressed by the judge, Fujiwara no Shunzei (1114-1204), and one of the participants, the monk Kenshō (1130?-1209?), who composed an extensive Chinjō ('Appeal') against Shunzei's criticisms of his work.

Roppyakuban uta'awase, its judgements and appeal are significant in this respect as the competition is the largest judged by a single individual, Shunzei, the most significant and influential poet of his age, while Kenshō's Chinjō, by virtue of its length and complexity, strongly resembles a work of poetics in its own right. Broadly, the two poets' conflict covers the following areas: use of Chinese vocabulary in waka composition; intertextual references to kanshi (Chinese poems) whether composed in Japan or China; and intertextual references to other Chinese literary-historical sources. Analysis of their statements has revealed that the poets vary between criticising the use of Sinitic vocabulary as unsuitable; are equivocal about overly Sinitic topics; praise identifiably Sinitic inspiration for waka composition; and alternately praise and criticise reference to Sinitic sources as evidence for critical positions on other waka in the competition.

#### **"Fujitani's *Kazashishoo*"**

**Paul Warnick**, Brigham Young University

During the middle of the Edo period, kokugaku studies emerged in Japan, based on scholarship in the areas of kogaku, wagaku, and kagaku. The philological and exegetical approaches that characterized much of the kokugaku scholarship provided a natural foundation for the development of kokugogaku studies that arose during this same period.

Fujitani Nariakira was a groundbreaking scholar of the time, a contemporary of the more well-known Motoori Norinaga. Fujitani is one of the most eminent scholars of Japanese grammar, the first to systematically categorize parts of speech according to their functions. He analyzed the Japanese system of conjugations, and is also known for identifying specific time periods in the development of the Japanese language.

His two main works were *Kazashishoo*, published in 1767, and *Ayuishoo*, published in 1778. His analysis of the language centered on four categories, based on an analogy to the human body, which he labeled as follows: Na (the body), which included taigen; Yosoi (the clothing), which included yoogen; Kazashi (adornment in the hair or cap), which included fukushi, setsuzokushi, rentaiishi, kandooshi, etc.; and Ayui (a hem-binding cord), which included joshi and jodooshi.

*Kazashishoo* discusses 96 words or phrases. Fujitani's analysis of each includes an interpretive, concrete explanation of the meaning, the equivalent term in colloquial language, and representative examples of its use taken from prominent poetry anthologies, such as *Kokinshuu*, *Gosenshuu*, and *Shuuishuu*.

This paper introduces *Kazashishoo* and discusses Fujitani's analysis and its significance at the time and also for today's scholars. Examples of his analysis are included. A deeper understanding of his contributions provides a richer appreciation of premodern Japanese. Fujitani's work is important in better understanding the language of premodern Japanese, premodern Japanese texts, and the culture that produced those texts. *Kazashishoo* has application and significance in both linguistic and literary studies.

#### **"Patterns and puzzles: Allusive strategy in the *Genji hinagata*"**

**Michelle Kuhn**, Yasuda Women's University

Extant *kosode* pattern books from the seventeenth century are filled with allusions to classical Japanese literature, however the text is limited to short comments on color and construction. In the *Genji hinagata* (printed 1687) each pattern represents a fictional or historical woman from classical Japan, sometimes by displaying her name as in the case of Murasaki from the Tale of Genji. On the facing page, short texts introduce the woman and the pattern. Few designs are as simple as Murasaki's. In Fujitsubo's case, the pattern does display wisteria, her namesake. Yet, the accompanying passage asserts that her pattern represents a poem by Ki no Tsurayuki's daughter. How can these two women, one fictional and one historical be linked? Like answering a logic puzzle, the reader must make mental leaps from Genji to other classical sources to comprehend the design. The woman who grasps this connection is the embodiment of Edo period education for girls.

Ayaka Baba (2012) has suggested that the artists who designed the *kosode* and artisans who executed the designs both had sufficient literacy to create patterns adorned with kanji. The fact that the *kosode* wearers were also literate is undisputable, but some have claimed that women read only primers and digests rather than the original texts. Prior research of this pattern book has treated five of the twenty-seven classically inspired patterns. However disregarding the passages to interpret solely the patterns has led to faulty conclusions. By focusing on the interplay between the passage and the pattern, this study will show the complexity of textual allusion within the *Genji hinagata* and show that Edo women possessed a wide knowledge of poetry and prose spanning the length of Japanese history.

#### **"Teaching classical poetry beyond the "original": The case for manga *Chihayafuru*"**

**Lindsey Stirek**, Ohio State University

In classical Japanese literature, we often give priority to the original work, teaching it in its modern translation or simultaneously teaching classical Japanese as we teach the text. However, this neglects the current reality of classical works, which do not exist only in their "original" form, if a true original is extant at all, but also in remediations. The latest and most popular medium to contain the poems of Ogura Hyakunin isshu is the manga *Chihayafuru*, and I aim in this paper to demonstrate that despite the general attitude of dismissal towards manga and popular culture in general, Ogura Hyakunin isshu stands to gain from its translation into this medium rather than to suffer for it, and that this manga should be viewed as part of the greater biography of this work as well as a legitimate means by which to introduce classical Japanese poetry to students.

The manga *Chihayafuru* is a means for modern readers to understand classical poetry both through text, as the poems in the manga are introduced in the original classical Japanese and modern translation, and through images, which contribute to multimodal interpretation and cross-over between the world of the poems and the modern setting. *Chihayafuru* also has a large fan-base and has been drawing younger readers to the sport karuta and poetry by extension, creating a new generation of poetry readers. In this paper, I suggest that it is equally as important when introducing students to classical literature to introduce the way it is read in Japan now, as these interpretations are part of an ever-evolving afterlife of the original work, which, in the case of Ogura Hyakunin Isshu, is itself an afterlife of the original poems.

### SESSION 3-D: LANGUAGE AND TECHNOLOGY PAPERS [ RIVERWAY ROOM ]

Chair: Satoru Shinagawa, University of Hawaii

#### 「ICTを活用した日本語学習者における音声習得—米国人学習者を対象とした縦断調査の結果から—」 (Utilizing information and communication technology in learning Japanese pronunciation: Results of a longitudinal study of an American learner of Japanese)

Takako Toda, Waseda University; Masako Okubo, University of Tokyo

筆者らはハーバード大学とMITの共同開発によるグローバルMOOCのedXにおいて、世界初の日本語教育関連講座となる「Japanese Pronunciation for Communication」(JPC)を2016年に開講し、第7期目を迎えている。本講座の登録者数は5万5千人を超えており、現在、本講座の受講者（初級～上級）を対象にICTを活用した音声教育の効果検証を多角的に行っている。

本研究では、JPCを利用して発音学習を行った超級日本語レベルの米国人学習者に対して全7回の縦断調査（質問紙、インタビュー、録音課題）を実施し、ICTを活用した学習者の学びを明らかにし、効果検証を行った。超級日本語レベルの学習者を対象としたのは、調査協力者の初級から超級までの日本語学習を振り返り、その間にどのような発音学習が行われ、変容があったのかを明らかにするためである。本ケーススタディーの結果、明らかになった点は以下のとおりである。

質問紙およびインタビュー調査から、対面授業でリピート形式によって行われることが多い発音指導において、オンラインでも発音学習が可能であることが示された。また、日本語を使用する職場や生活環境ではネイティブレベルの発音が求められる場面があるという実態が浮き彫りとなり、日本語が超級レベルであっても発音指導を求めている学習者の存在が明らかになった。

さらに録音課題調査から、超級レベルになっても「アクセント」および「リズム」に誤用が残ることが明らかになった。五十音の発音指導がイメージされやすい中、韻律特徴に問題が残ることが示されたことにより、指導のポイントが浮き彫りになった。

#### “Pedagogical implications of language production exercises based on ASR technology”

Masato Kikuchi, Georgia Institute of Technology

The advance in automatic speech recognition (ASR) technology is accelerating. What did not work in ASR-2017 (e.g., Both 病院で薬を買った and 美容院で薬を買った became 病院で薬を買った in 2017) now works in ASR-2019. At first glance, the current state of the art shows the accuracy of voice-to-text conversion seems to be near 100% with minor idiosyncrasies in punctuation. Upon further investigation, I found certain recurring issues that reveal the nature of this technology including a tendency to overcorrect (or normalize) the voice input (e.g., ボランスキー氏を呼んだ became ボランスキー死を選んだ). Google has made its ASR technology available to public through an Application Programming Interface (API) within Chrome. By utilizing this currently free capabilities of Chrome, I have created Japanese language production exercises that can be used in a language course as Web-based self-study activities to practice continuous speech in the target language. This exercise allows learners to speak at their turns in conversations and each student turn is automatically transcribed into text. The transcribed conversation can be saved as a text file and uploaded to any LMS to be reviewed by the instructor later. In this presentation, I will demonstrate how this voice-to-text exercise works and discuss the quality of language production by students and native speakers. Results of a pilot study of feeding conversational data exercise used in typical Japanese textbooks (e.g., げんき) as well as student production data will be critically examined in terms of its pedagogical implications.

#### “Quantifying the pedagogical importance of Japanese accent rules: Preliminary analyses of a new accent-annotated corpus of elementary Japanese”

Aaron Albin, Kobe University; Ruilai Wang, Nanjing Normal University; Rie Oyama, Doshisha University

Japanese has numerous morpho-phonological rules involving pitch accent insertion (e.g., koko-ni vs. koko-ni-wa), deletion (Kōbe + Bifu = kōbeBifu), and movement (taBERu vs. TABete). One of the many reasons why such rules are rarely incorporated into classroom instruction is the immense complexity of the system. For example, the appendix to the Shinmeikai Japanese Accent Dictionary (2nd edition) covers 100 topics spanning 116 pages. In order to be useful for teachers, such information would first need to be filtered down to just the rules that are most frequent (and thus most communicatively important). Unfortunately, this is currently impossible since no available study has attempted to quantify accent rule frequency using corpus data.

To fill this gap, over a two-year period, a corpus was compiled representing every Japanese word and sentence in the popular textbook series “Genki” (2nd edition). A total of six books were processed: first-year textbook and workbook, second-year textbook and workbook, answer key, and teacher’s manual. Since the corpus contains homeworks and in-class practices, the result is a comprehensive picture of not only the linguistic input but also the output that a learner would experience over the first two years of learning Japanese. Once transcribed, all 28,000+ database entries were annotated for pitch accent by a team of phoneticians and trained native speakers. Using various computational tools (e.g. Web Chamame), this database can now be mined to identify, for the first time, which accent rules are most common in classroom discourse.

This presentation will focus on analyses of the “Conversation/Dialogue” portion of the corpus, whose results suggest that the set of rules that are frequent enough to merit teaching is somewhat simpler than Shinmeikai’s 116 pages would suggest. Moreover, the accent-related information that would need to be taught could in principle easily be integrated with the normal grammar curriculum.

### **“Evaluation of Japanese Handwriting Apps”**

**Satoru Shinagawa**, University of Hawaii; **Mayumi Ishida**, Dartmouth College

It is not rare to see the Japanese language taught online these days. By using the available technology, it is possible to provide sound files to improve listening comprehension; it's possible for students to record sound files and upload for evaluation, and it is possible to obtain some help in reading such as reading tutor to help look up vocabulary. Students can send compositions for feedback as well. However, when a Japanese course is taught online, one of the important factors of learning Japanese is lacking. That is handwriting. In an online course, almost all submissions are made online. This implies that students type Japanese only on a computer using a keyboard, and they have fewer opportunities to handwrite hiragana, katakana, and kanji.

With the advancement of technology, there are various tablet apps that recognize handwriting. With the introduction of the 6th generation iPad and the Apple Pencil, recognition of handwriting became possible on the device by using the pressure and angle of the writing device. This method is very close to writing with brushes. Presenters will discuss various apps which make the handwriting of Japanese possible. Also, the pros and cons of each app will be reviewed, including the price of each app, availability of the platform (iOS, Android), and ease of use. The audience will have a chance to see a demo of those apps and obtain the knowledge of which apps meet their needs.

### **SESSION 3-E: PEDAGOGY PAPERS [ ARNOLD ROOM ]**

*Chair:* **Saori Hoshi**, University of British Columbia

#### **“Integrating language and content in the undergraduate capstone experience”**

**Aragorn Quinn**, University of Wisconsin, Milwaukee

Japanese programs at US universities, teaching a DLI Category 4 language, have typically employed the “Adjunct Model” in structuring their curricula. In other words, undergraduate courses are typically taught on parallel tracks, with Japanese language courses on the one hand and English language content courses on the other. This model has remained relatively stable since the first boom in university Japanese majors and programs in the US after the end of World War II. However, Japanese programs are increasingly employing an integrated approach in curricula known as CBLI (Content Based Language Instruction). This change is reflected in both course offerings at a wide range of institutions and in recent scholarship (Douglas 2017; Brinton, Snow, and Wesche 2008; Crandall and Kaufman 2002). The success of CBLI initiatives suggests that combining this framework with a capstone experience, another “high impact educational practice” (McGill 2012; Kuh 2008), could yield positive learning outcomes for undergraduate Japanese majors.

This paper evaluates the recent implementation of a new set of capstone criteria for the Japanese major at a mid-sized, access mission R1 institution. Beginning in 2017, this program replaced existing capstone criteria with a set of criteria based on a CBLI model. This paper evaluates the effect of these changes on student learning outcome results and on the perceived value to students of the capstone requirement itself. Through the use of anonymous surveys and using the “phenomeography” methodological approach first employed by Emily Adler, this paper evaluates the costs and benefits of programmatic changes to the capstone requirements over the course of the first five semesters of this CBLI-based capstone experience.

#### **「インターネットミームとは？デジタルネイティブに合った新しい活動の実践報告」 (What is an internet meme?)**

**Trendy activities geared towards digital natives)**

**Yuta Mori**, Leiden University; **Ryosuke Sano**, University of Florida; **Brian Hagihara**, University of South Florida

近年の第二言語習得論では、発達の個人差を踏まえた学習メカニズムの解明と、その個人差を考慮したカリキュラム構築、柔軟な教授法の確立に焦点が当たっている（小柳・向山, 2018）。創造力もその個別性の一種であり、一般的に学習到達度と深い関係があることが証明されている。創造力と言語学習との直接的な関係を調べた研究は比較的少ないものの（Dörnyei, 2005）、英語学習においては、Meera and Remya（2010）や Sutrisno（2007）らが創造力の高さは英語学習の成功に有意性があると主張している。近年の日本語教育でも、学習者の自律学習確立のため、創造力や自主性を促すような言語活動の実践報告が多く見られる。

本発表では、創造力を喚起させる言語活動の一例として、インターネットミームを使った活動の利点と効果を考察する。インターネットミーム（以下「ミーム」とする）は「インターネットを通じて人から人へと、通常は模倣で広がっていくメディア」（Godwin, 1994）、つまり、インターネット上で流行する画像、動画、言い回しのことである。ミームは一般的に、画像と簡潔な文章を用い、社会批判や風刺などをして閲覧者を笑わせるために作られ、創造性が求められる能動的な作業だと言われている（Nissenbaum & Shifman, 2017）。

ミームを用いた言語活動はスペイン語や英語の実践例はいくつか見られるが（Purnama, 2017; Orsatti, 2017）、日本語教育の活動ではほとんど見られない。本発表では、日本語でミームを作る活動を初中級レベルで行った実践報告、また活動後の学生アンケートの結果や教師の内省をもとに、活動の利点と問題点をまとめ、ミームを日本語教育に取り入れる意義について考察する。

#### **“Examining the usefulness of the AP Japanese speaking tasks from a perspective of structural complexity”**

**Nana Suzumura**, University of Hawaii

The AP Japanese exam is a large-scale high-stakes test. While the validity of its multiple-choice sections has undergone constant statistical scrutiny, the validity of its free-response sections (speaking and writing) has rarely been examined. The present paper is part of a larger study examining the validity of the AP Japanese speaking section. It uses Bachman and Palmer's (1996) 'test usefulness' framework to investigate the usefulness of two speaking tasks (conversation and presentation) by comparing the structural complexity of examinees' responses for those tasks. The data was collected from 81 high school students using four sets of conversation tasks and two sets of presentation tasks. The counts of adverbial subordinations, embedded clause

structures, main finite clause-initial, -middle, and -final coordinating expressions were tabulated. Then their average frequency ratios per main finite clause were compared between two task types using a two-way repeated measures ANOVA. There was a statistically significant effect of task type on syntactic structures, suggesting that the conversation task and presentation task elicited language samples with different syntactic characteristics. Post-hoc paired-samples t-tests found statistically more adverbial subordinations and clause-initial coordinating expressions in the conversation task. Meanwhile, more clause-middle coordinating expressions were found in the presentation task, meaning that clause-middle coordination expressions were used to combine non-finite clauses to list actions and descriptions. No statistically significant difference was found for embedded clauses. This suggests that the conversation task elicited structurally more complex language samples than the presentation task despite the lack of preparation time. The present paper will discuss possible reasons for this surprising finding and present ideas for improving the exam.

### **"The role of L2 instruction in the development of interactional competence: Japanese interactional particle ne"**

**Saori Hoshi**, University of British Columbia

The present study examines the development of interactional competence (Hall, et al., 2011) by JFL classroom learners as evidenced by their use of Japanese interactional particle *ne* in conversations with native speakers and peers. While studies have investigated the development of an array of interactional resources by L2 learners in study-abroad and classroom socialization contexts (Masuda, 2011; Ohta, 2001), research documenting learners' use of such resources in an explicitly instructed setting is rather scarce. This study explores the role of L2 instruction in learners' ability to participate in assessment activity (Goodwin, 1986) through the use of particle *ne* for alignment moves and intersubjectivity.

The study implements pragmatics-focused instruction, incorporating awareness-raising and conversational activities, in a third-semester Japanese class throughout one semester.

Qualitative analyses of pre- and post-instructional conversation data evidence learners' changes in participation with *ne* over time: while *ne* was predominantly used in agreement and formulaic expressions at the onset, *ne* emerged in follow-up, initial, and extended assessments in order to invite the recipient (Pekarek Doehler, 2018) for negotiation of stance, joint assessment of the current talk, and topic shifts. The findings also demonstrate a developmental trajectory in learners' use of *ne*: the mastery of initial-turn assessment *ne* appears to occur only after that of follow-up *ne*; in speaker turns, it requires the ability to judge whether what is being assessed can be jointly relevant for co-participants' alignment, whereas it seems easier to do so in listener turns where the assessable has already been shared at the time of the receipt. This study offers pedagogical insights to explore discourse-situated instruction of "grammar as an emergent system" (Bybee & Hopper, 2001) and how such a proposed instructional approach enables learners to actively pick up affordances to express their own voice, one that reflects more than learning from the textbooks.

## **SESSION 3-F: LITERATURE PANEL [ OLMSTED ROOM ]**

*Chair: Kendra Strand*, University of Iowa

### **Panel Title: Statemaking and Storytelling at the Margins: Travel, Contact, and Border Construction in Medieval Japanese Narrative**

In medieval Japan, geographic borders were ambiguous regions where political power was articulated unevenly, and strategies for representing geographic spaces were fluid and subject to continual redefinition. This panel introduces three journeys into medieval border regions: each paper addresses a moment in which borders are tested, identified, reimagined, and asserted; and each considers the resulting encounters across region, social class, or political and religious ideology. Together the studies illuminate how notions of "Japan" are ideological constructions of land, landscape, and expressions of political power; and how this occurs not from a geographic or political center but at the marginal space of the border. Kendra Strand examines the consequences of an imperial court's displacement from the capital into a political and cultural periphery. When losing control of the imperial palace exposes his emperor to unprecedented levels of visibility and interaction across social class, Nijō Yoshimoto uses clothing to reproduce the symbolic boundaries necessary for maintaining imperial legitimacy through social distance. Sugiyama Kazuya explains the strategic act of "recognition" in an early-medieval account of a shipwreck on an island which may not have been Ryūkyū but which is actively "recognized" as such, interrogating the peculiar creative logic at work in such acts of identifying unknown territories at the edges of the known world. Patrick Schwemmer explores the imaginary universe of late medieval Japan through materials from the Jesuit mission, including accounts of traveling bards singing ballads of Christian saints' lives; Japanese-language depictions of saints' lives on dizzying journeys throughout the Mediterranean; and narratives of Japanese traveling the world during the Age of Exploration, when knowledge of geography expanded rapidly even as it gave way to a world that was both more connected and more neatly bordered, heralding in this way the end of medieval Japan.

### **"Fabricating space: Clothing, spectacle, and ritual space in Nijō Yoshimoto's "'Solace of Words at Ojima'"**

**Kendra Strand**, University of Iowa

This paper examines how clothing is used to construct and demarcate ritualized imperial space in Nijō Yoshimoto's travel diary, "Solace of Words at Ojima" (1353). "Solace of Words" narrates a journey by Yoshimoto, as he accompanies Emperor Go-Kōgon (r. 1352-1371) to escape a military attack in the summer of 1353. They take refuge in Ojima, a remote landholding in Mino Province (Shiga Prefecture). Yoshimoto confronts the discomfort and instability of this unfamiliar place so far removed from the imperial palace. At Ojima the imperial party must create a makeshift "temporary palace" and interact with a broad spectrum of people beyond the typical courtier. Contributing to this social and political precarity in the periphery, Go-Kōgon is now exposed to the gaze of warriors and "local commoners" who crowd along the roadside to witness the spectacle of a flurried procession away from the capital.

Rather than attempting to overlook or erase these moments of exposure, a response that would only emphasize their vulnerability, Yoshimoto instead uses descriptions of clothing and architectural spaces to redefine and assert the boundaries such objects produce: clothing and decorative fabric create a symbolic distance from commoners in close physical proximity; courtiers adjust to the bizarre novelty of wearing rough but practical “warriors’ garb”; and vivid descriptions of Ashikaga Takauji’s army shift the vulnerability of exposure away from the emperor and take pleasure in a spectacle of the potential for violence these powerful men wield. Finally, when order is restored, Yoshimoto narrates an imperial procession that becomes smaller and more exclusive as it crosses each successive boundary on the way back to the capital, in a conclusion that uses outward appearance to reinforce social position and award access into the highly structured and regulated space of the imperial palace.

**“Recognizing Ryūkyū: To the ends of the medieval Japanese earth”**

**Kazuya Sugiyama**, Aoyama Gakuin University

This paper explores the margins of the medieval Japanese geographical imagination with reference to period maps and works of literature. “Lost at Sea in the Ryūkyūs” (Hyōtō Ryūkyūkoku ki) was written in 1244 by the monk Keisei (1189–1268). It relates the experience of a group lost at sea during a voyage to Song China who come upon an unknown island, which may or may not have been Ryūkyū, despite the title. The protagonists never actually go onshore or converse with the inhabitants of the island: rather, they debate among themselves aboard ship just where it is that they have arrived, and their unanimous conclusion is to “recognize” (*shikibetsu*) the island as Ryūkyū. This act of “recognizing” an unknown land can be seen elsewhere, and sometimes it involves outright misrecognition. Many early-seventeenth-century Japanese visitors to Angkor Wat in Cambodia, for example, “recognized” it incorrectly as the Jetavana monastery (J. gion shōja) founded by Gautama Buddha in India. To be sure, this is not only a Japanese phenomenon: Europeans also “recognized” the Americas as “India” in their own way. This kind of allegorical cognition of the ends of the known world produces “things seen and heard” which from a modern perspective might be seen as illusory, but the more unknown the territory, the more fanciful this medieval Japanese space of geographical “recognition” becomes.

**“A rapidly expanding universe: Travel and geography in Medieval Japanese Christian saints’ lives”**

**Patrick Schwemmer**, Musashi University

In the Jesuit archive in Rome, there is a letter from late-1580s Japan which contains a previously unstudied account of a blind Japanese slave boy, whose specialty was to play the “viola” (probably a biwa) and sing Japanese ballads of the Christian saints. He is sent into the eastern provinces of the Kantō to tell his tales there, and his performances prove so popular among the provincial nobility that they not only support him and offer to retain him as a hired bard: multiple young members of their class also visit the Jesuit house in Sakai to learn more about this new religion. Among them, one Tokugawa Ieyasu also comes calling, offering trading ports in his lands as he would later do for the Spanish in an attempt to set up a trade route between Acapulco and what later became Edo. Meanwhile, in both collections of Japanese-language saints’ lives that survive from the Jesuit mission, the opening stories are those of Saints Peter and Paul, and the versions used take the audience on a dizzying tour of the Mediterranean world. Drawing more heavily on the apocryphal Acts of Peter and Paul than any biblical account, they relate the Apostles’ magical battle before Nero with the evil wizard Simon Magus, who uses *tengu* magic to trick the Roman Emperor into favoring paganism over Christianity. This paper considers this narrative material in the context of the rapidly expanding worldview of late medieval Japan

**Discussant**

**Christina Laffin**, University of British Columbia

**2:50 p.m.–4:30 p.m. — Session 4**

**SESSION 4-A: PEDAGOGY PANEL [ PUBLIC GARDEN ROOM ]**

**Chair: Noriko Fujioka-Ito**, University of Cincinnati

**Panel Title: 「日本語初級から中級コースへの移行の問題点とその対策のためのカリキュラムの改善」 (Curriculum Development to Solve Problems of Transition from Beginning to Intermediate Level Japanese Courses)**

以前から多くの大学で日本語初級から中級レベルのコースへの移行に関する難しさが指摘されている。本パネルでは、問題意識を共有する規模の異なる4つの大学がそれぞれのプログラムのニーズに合わせて実施してきたカリキュラム改善の実践報告を行なうことで、この問題に対処する可能性を提示し、日本語教育の向上に貢献することを目指す。発表1では、運用能力向上を目指した言語管理理論やコンテンツベースアプローチなどの日本語中級レベルの教科書作成の背景になっている教授法理論にもとづきながら、初級レベルの教科書を終えた学生が中級レベルコースで継続して日本語能力が向上できるように改訂してきたカリキュラムの変遷について話す。

発表2では、初級レベルから反転授業を採用してアクティブ・ラーニングを可能にし、日本語2年目を終えた時点で初級レベルの教科書2冊の内容を超えたレベルの生成ができる学習効果をもたらした長期にわたるカリキュラムの成果を示す。

発表3では、日本語中級コースでの読解教材の情報理解を問題なく行えるようにするためにバックワードデザインを採用して初級レベルのコースの段階から読解の重要性を強調しているだけでなく、中級レベルへの移行の橋渡しをする目



的で付け加えた日本語2年目終了直前に使用している読みの学習を中心にしたユニットについて紹介する。発表4では、日本語学習を開始した初級レベルの学生のより多くを中級レベルに導くために、学習アプリを効果的に使用しながら、初級前半の1年間で体系的に文法導入を済ませ、後半の1年間で運用練習を繰り返す行なうことで中級への無理のない移行を達成するカリキュラムについて説明する。

**「教授法理論の変遷に伴う初級から中級コースカリキュラムへの移行の対策」(Strategies of bridging from beginning to intermediate course curricula based on pedagogical theories)**  
**Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati**

1990年代に出版された運用能力向上を目指した中級レベルの教科書は、基本的な文法と漢字の習得を終えた学習者を対象にし、言語プロダクトだけでなく接触場面や文脈を問題とした場面参加者の意識や規範を含めた相互作用が関心である言語管理理論が背景に作成されていた。そのねらいは、身近な状況に関するトピックを扱った現実的な内容の会話に参加でき、社会生活に必要な事柄が処理できる機能を身につけさせることであった。その後、コンテンツベースアプローチが幅広く採用され、テクノロジーの進歩も伴って、大学生の知的好奇心を満足させる内容を豊富に提供できるウェブベースの教科書が出版された。それによって日本に関する理解を深めながら内容のあるコミュニケーションに必要な知識や情報が得られるようになったが、基本文型口頭練習に偏る傾向がある初級から中級クラスへの移行がスムーズに行かないという問題が生じた。

筆者の日本語3年目のコースでもコンテンツベースアプローチのカリキュラムを始めた際、初級教科書を2冊終えたばかりの学習者には難度が高く、学生の保持率が低下する事態となった。その後、紆余曲折を経て、3年1学期目のコースでは、談話構成やコミュニケーションストラタジーを考えさせるなどの言語活動を通して、さらに言語使用場面で「できる」ことを増やすことを目標にしている教科書を使用している。同時に初級レベルの漢字を復習しながら3年目のコースの終わりには日本語能力検定試験N2レベルの漢字力が身につくようにカリキュラムを改善した。

本発表では、外国語教授法の理論に触れながら改訂してきたカリキュラムについて説明し、今後の展望を考察する。

**「教科書を超越しよう!」: 実践力のある学習者育成を目指して」(‘Go beyond the textbook!’: Establishing an effective learners’ community)**  
**Mieko Kawai and Tomoko Marshall, University of Virginia**

本発表では教科書をゴールとするのではなく、同じレベルの学生たちが共有する前提知識、つまりスタート地点として位置づけ、実践力のある学習者育成を目標とする日本語プログラムの取り組みを紹介する。

発表者の大学では、初級レベルから反転授業を徹底し、新出の語彙・文法だけではなく既習内容を組み合わせてフル活用させる発展練習を授業の中心としている。そこは「正解」が求められる場所ではなく、学習者自身が様々なアイデアを出し合うアクティブ・ラーニングの現場である。例えば、教科書は本質的に未完結でオープンな教材、いわば100点満点中80点の素材として提示され、グループに分かれた学習者は自分たちならどう手を加えるかという課題に取り組む。この際、教科書は学習者同士を強く結びつけるピアラーニング資料として機能する。こうした活動では21世紀型スキルである豊かな発想力、思考力、応用力などが求められる。また、思いやりのある言動や他者からの学びを含む内省記録なども評価の対象としており、言語能力の向上と同時に人間的な成長も促すことができる。

長期にわたる当学プログラム全体での連携努力の結果、進捗は速くはないが、初級二年を終えた時点で教科書を越えたレベルの会話や読み書きができる学生が例年8割以上で、学生の満足度は高く、中級への移行、あるいは留学や進学した場合に問題となるケースも稀である。

発表では、初級レベルの副教材や発展授業の具体例、クラスでの貢献度を重視する評価基準、学生が企画運営するワークショップ授業などの試みを共有する。また、学習者の負担軽減や転入生への対応など、現状の課題と今後の展望にも言及する。

**「中級レベルへの移行をスムーズにするための試み」(Attempts for smoother transition to the third-year level)**  
**Fukumi Matsubara, North Central College**

現在、米国の大学レベルの日本語教育では、100番台と200番台で口頭日本語中心の基本文法を学習したあと、300番台で急に読み書きの比重が増える言語学習になることが多い。これは、従来の日本語教育の目的の一つである日本学研究者の育成のためのカリキュラムの名残であるかもしれない。日本語学習者のニーズの変化、および日本語教育の質の向上に伴い、近年では、運用能力や内容重視の教科書・授業活動が導入され、実用的価値に結び付いた日本語教育になっているが、学生は依然として300番台で学習の質が変わることに抵抗を感じているようだ。

今後も300番台からの教育を学習者のニーズに応える形で向上していくことは大きな課題ではあるが、学習者の読解能力の充実が重要なことに変わりはない。発表者は学習者の100-200番台から300番台への移行、特に読みによる情報理解をよりスムーズにするために、バックワードデザインの考え方を基に、下記の試みを行っている。

1) 100-200番台のコースで、読み書きをより丁寧に教える。

従来は、口頭コミュニケーションの練習のために、読み書きの練習時間を犠牲にする傾向があったが、授業時間を読み練習に割り、読み学習について話すことにより、その重要性を学生の頭の中に植え込むと共に、読みの練習をして300番台の読み物に対する抵抗を少なくする。

2) 200番台のコースの最後に、読みを中心にしたユニットを付け加える。

300番台の教科書にならった、読みを前面におしだしたユニットを200番台の最後に付加し、学生に300番台からの方向性を予期させる。

本発表ではこれらの試みを紹介する。

## 「中級レベルへの無理のない移行を実現する新しい初級カリキュラムと教材」 (How to improve elementary level retention: A new approach and a new text)

Yoshiro Hanai and Shoko Emori, University of Wisconsin, Oshkosh

近年の高等教育における日本語学習者の100番台と300番台レベルの割合は5対1だと報告されている。学習者の20%しか300番台の授業を取らないという現状は現行の初級カリキュラムの問題を如実に表している。学習者の保持率がこのように低い間は、個々の学習者の学習成果いかんに関わらず、初級カリキュラムが成功していると主張するのは難しい。逆に、この割合が改善出来れば、プログラムの縮小・閉鎖というアメリカの外国語教育界が直面している問題の直接的な解決にもなる。

このような問題意識の下、発表者は日本語を履修し始めた学習者の半数以上を3年生まで導くことを目標にカリキュラムの根本的な見直しを行い、初級の学習内容を減らすことなく学習者の保持率を向上させた。要点は以下の通りである。

- 初級文法の導入を全ての初級コースに均一に振り分ける現行カリキュラムは効率的ではない。文法導入は初級として当てている期間の前半（1年生と2年生を初級と考える場合は1年生のみ）で済ませ、後半は運用練習を繰り返すことにより、中級への無理のない移行が可能になる。
- 現在よく使用されている初級教材の文法導入は体系的に行われていないため非効率的である。より体系的な文法導入を行うことで学習者の文法理解は格段に向上する。
- 今までの初級教材は、既習学習項目の保持に対する手当が乏しい。学習アプリを効果的に使用し学習者が既習学習項目を確実に保持出来る手段を提供することで、より多くの学習者を300番台へ導くことが出来る。

本発表では、実際に使用したカリキュラムと教材を元に学習者の保持率向上に繋がる初級コースのデザインについて議論する。

## SESSION 4-B: SIG PANEL: PROFESSIONAL DEVELOPMENT [ THE FENS ROOM ]

*Chair:* Junko Mori, University of Wisconsin, Madison (with Atsushi Hasegawa, University of Hawaii; Shinsuke Tsuchiya, Brigham Young University)

### **Panel Title: Diversity, Inclusion, and Professionalism: Rethinking Goals of Japanese Language Education**

In recent years, diversity and inclusion have become a major concern in academic and professional institutions. As educators, we are responsible for creating environments where a diverse population of students can communicate beyond differences and learn from each other, and for developing intercultural competence and disposition necessary for them to become an effective member of today's globalized society. Language classrooms present both opportunities and challenges in this regard. Building on the results of a recent survey presented at the AATJ 2019 Keynote Session, this panel explores how goals of Japanese language education can or should be reevaluated in this light.

The panel consists of a brief introduction by the panel organizers, four presentations described below, and discussion among the audience. Presentation 1 delivers quantitative and qualitative analyses of the survey results that illustrate contradictions or dilemmas between aspirational ideals and mundane practices. The co-presenters also reflect on the goals of their respective programs and courses vis-à-vis the survey results. Presentation 2 discusses the significance of finding a balance between diversity and language standard, sharing the perspective of a teacher trainer who works with an increasingly diverse population of teaching assistants. Presentation 3, on the other hand, calls for paradigm change in Japanese language pedagogy, comparing what has been accomplished in Spanish language teaching in the U.S. and the current state of Japanese language education. Further, Presentation 4 introduces the perspective of "accidental" Japanese language teachers, who received training in literature, film or cultural studies but were positioned to teach Japanese language courses.

The seven presenters represent diverse ethnic, linguistic, and disciplinary backgrounds and work at a wide range of institutions from large public institutions to small private colleges. The range of perspectives and experiences shared by the presenters, we hope, will prompt a lively and candid discussion involving the audience.

### **"Goals of Japanese as Foreign Language education: The Fall 2018 survey results and reflections"**

Atsushi Hasegawa, University of Hawaii; Jisuk Park; Kimiko Suzuki, Haverford College; Junko Mori, University of Wisconsin, Madison

With the ever-growing interest in diversity and inclusion in academic discourse, there is an urgent need to understand the current status of JFL education and to reevaluate its mission in this light. In the fall of 2018, we conducted an online survey to look into Japanese-language educators' beliefs and experiences concerning diversity and inclusion, as well as their views on professionalism. Invitations were sent out to major professional listservs in North America (e.g., AATJ, CAJLE, SenseiOnline), and a total of 355 teachers responded to the survey. The responses were analyzed quantitatively (including statistical tests) and qualitatively (i.e., thematic analysis).

Quantitative data suggest that the survey respondents almost unanimously agreed on the importance of global and translingual/transcultural competence as a crucial goal for JFL education. However, the items concerning the legitimacy of language varieties (e.g., standard vs. regional dialects), the importance of accuracy (e.g., grammar, pronunciation), and the views on Japanese culture (e.g., emphasis on uniqueness) received rather conflicting responses from the participants. Moreover, qualitative comments brought up the issues of native-speakerism, nihonjinron, and heteronormativity ideologies as prevailing in JFL education. In short, the survey results illuminate both converging and diverging perspectives of the survey participants and contradictions or dilemmas between aspirational ideals and mundane practices.

This presentation highlights the analysis of the survey results concerning the goals of JFL education and our own reflections on the goals of our respective programs and courses. By presenting our experiences working in diverse institution

types (e.g., large state university, large private university, small liberal arts college), we would like to stimulate further discussion with the audience.

**“Finding a balance between diversity and language standards: A case of a Japanese language program in a private university”**

**Shinsuke Tsuchiya**, Brigham Young University

One of the challenges that language professionals face in our increasingly diverse communities is establishing a balance between diversity and language standards. While Standard Japanese can be considered a common language to interact with the majority of Japanese speakers who may not be accustomed to nonnative speech (ACTFL Proficiency Guidelines, 2012), the strict requirement to follow the monolingual standard may disregard the legitimacy of multilingual speakers, including nonstandard dialect speakers. An increasing number of researchers suggest that it is critical that language professionals rethink or even resist the practices that reinforce the ideologies of standard language that may be entirely disregarding diversity (Doerr and Sato, 2008; Tanaka, 2013).

Yet a recent survey indicated that many Japanese language educators still support the significance of Standard Japanese (Mori, Hasegawa, Jisuk, Suzuki, 2019), and policies that support the monolingual standards (e.g. nonuse of English) are still commonly implemented. While these language standards help ensure the quality of language instruction suited for monolingual settings, they may also discourage variations among speakers especially when strict standards are imposed (Horwitz, 1996). This is crucial for those who did not grow up in a monolingual Japanese community such as *hāfu* or non-Japanese Teaching Assistants (TAs), who make up more than half of the TA population at Brigham Young University (BYU). The changing dynamics in teacher population calls for a need to address diversity and inclusion in the language program’s objectives to validate the unique identities of multilingual speakers on personal and professional levels.

In my presentation, I will discuss pros and cons of setting standards in language programs and relevant findings concerning the native speaker fallacy (Tsuchiya, 2019). Then I will share my shifting perspectives on errors, interlanguage, dialectal differences, and certain “nonstandard” practices (e.g. codeswitching) in my experience of training, hiring, and supervising TAs at BYU.

**“The case for paradigm change in Japanese language pedagogy: Accommodating calls for diversity and inclusivity”**

**Mahua Bhattacharya**, Elizabethtown College

It is difficult to ignore recent calls for change in the manner in which Japanese is taught in the US. A recent survey presented at the AATJ 2019 Keynote Session indicates that an ideology of monolingualism, which has dominated the mindset of pedagogues in the country, is being challenged from multiple fronts. This includes conditions on the ground—i.e., a shortage of native Japanese language teachers, compulsions to train foreign teachers to teach Japanese, etc.—but also governmental mandates that insist on a more diverse and inclusive curriculum reflecting domestic conditions in the US.

This paper will explore the possibilities of a different format of language pedagogy that emanates from Spanish language teaching in the US. Valdes makes excellent suggestions about how to negotiate similar mindsets in Spanish language teaching in the US which privilege Spanish spoken in Europe and attempts to ‘correct’ the ‘Spanishes’ spoken in Latin America (Valdes, et al: 2003). She indicates that the contents of textbooks should be reexamined and, wherever possible, diverse worldviews incorporated.

To do this effectively for Japanese language pedagogy, collaboration between native and non-native speakers should become the norm. Most Japanese language textbooks used in the US today tend to imagine a Chomskyan ‘ideal speaker’ through which the language operates. What is needed is to pry open that imagined world and make it interact with the environment in which the language is used. This means making the language more ‘real.’ What is considered an ‘ideal’ language—with certain norms dominating its structure (such as a certain kind of pronunciation, vocabulary usage, and even grammatical structures that demand ‘correctness’)—needs to be reevaluated. This presentation will examine some textbooks and show how such measures can be taken. Once we are more mindful of the ideological biases we share in how we use language, we will be able to take the first steps towards creating a more inclusive world.

**“The generalist dilemma: How accidental language teachers could help Japanese pedagogy”**

**Brian Dowdle**, University of Montana

Generalists—faculty who teach both Japanese language and English-based curriculum—face a dilemma: are they language teachers or are they teachers of another field? The short answer is that they are both. However, many generalists, especially non-applied linguists find themselves working as “accidental” Japanese language teachers, since originally they were trained in literature, film, or cultural studies. In their mind, they are first and foremost teachers of those fields—not language. As a result, they may not have an academic identity of being a Japanese language teacher, per se. What does it mean for the field of Japanese language instruction that a non-insignificant number of practitioners are doing so by accident?

As this presentation will show, the generalist’s dilemma provides a window into larger problem of diversity in Japanese language instruction and its relationship to Japan studies. Generalists are important to the field and maybe incorporated further into the archetype of Japanese language instructors, rather than feeling like second-class citizens. On the one hand, Japanese language specialists need to accept generalists a key contingent of Japanese language teaching. On the other, generalists should be encouraged to embrace their dual identity, because it is part of the future of Japanese pedagogy and Japan studies.

Finally, generalists who are accidental language teachers provide opportunity to think about the learning outcomes of language teaching. Japanese linguistic training should not privilege abstract linguistic skills alone. Rather, it should try to highlight applied linguistic competences. This is what generalists offer: diversity of instruction in literature, film, and cultural studies, coupled with linguistic excellence. Generalists provide models of excellence in language as well as cross-cultural

competencies. They show the values and skills of a liberal arts education with broad exposure to ideas and methodologies from across the fields comprising Japan studies.

#### **SESSION 4-C: SECOND LANGUAGE ACQUISITION PAPERS [ JAMAICA POND ROOM ]**

*Chair: Masumi Reade, Sophia University*

##### **「米国のJFL学習者による日本語の会話の含意 (CI: Conversational Implicature) の理解について」 (Understanding intended meaning of Japanese conversational implicature (implications in Japanese) by JFL learners in U.S. colleges)**

**Masumi Reade, Sophia University**

本研究では、米国の大学の日本語学習者を対象として、会話の含意による話者の意図を理解する上で、含意の種類、学習者のレベル、母語話者との日本語による接触の頻度、及び短期(3ヶ月未満)日本滞在が影響を及ぼしているかどうかを調査した。

中間言語語用論の研究では、産出能力の研究が多数を占め、理解能力の研究も、ほとんどが英語学習者対象で (Bouton 1988, Yoshida 2014, Taguchi 2002, 2005など)、日本語学習者対象のものは少ない。日本語母語話者の会話には頻繁に含意が使われるため、学習者が含意をよりよく理解できれば、母語話者とのコミュニケーションを円滑にする上で役立つのではないかと考えた。

調査の結果、学習者の含意理解度には、教室での学習年数による有意差が見られ、運用能力が含意の理解度に影響を与えるという先行研究 (Roever 2006, Garcia 2004など) を支持する結果となった。更に、母語話者との日本語による接触がある学習者 (対象者全体の20%)、及び日本滞在経験のある学習者 (29%)の方が、含意の理解度が高い傾向にあるという結果も見られた。含意の種類による理解については、学習者の日本語の知識や英語における含意の転移に影響を受けることも示唆された。

調査協力者が記述した回答の選択理由から、特に1、2年目の学習者は会話の含意を字義通りに解釈してしまう傾向が強く、語用論的理解能力が未だ発展途上であると考えられる。本発表では調査結果の考察に基づき、日本語教育への提言として、会話の含意の明示的指導、及び教室外での日本語使用の重要性にも触れたい。

##### **"Language learning as translingual practice in a Japanese restaurant in Toronto"**

**Hae Ree Jun, University of Wisconsin, Madison**

This study explores language learning as translingual practice. Translingual practice describes the ways in which people draw on diverse linguistic and non-linguistic resources for communication (Canagarajah, 2013). To examine how language learning is integrated in translingual practice, this study draws examples from the interviews conducted with two participants from Spain and Korea who work in a Japanese restaurant in Toronto. At the time they started working in the restaurant, the participants had previous knowledge of Japanese, which is however limited to the basic expressions such as a common greeting. On the other hand, other Japanese verbal routines, such as greetings toward customers, numbers, names of food and drink items, and calling out orders, are adopted not only to communicate orders between different areas of the restaurant, but also to promote the Japaneseness of the restaurant. While the participants have faced challenges at first in engaging the ordering practice, they gradually become able to fully perform the ordering practice. In doing so, they strive to not merely memorize the literal meanings of Japanese expressions, but adapt various linguistic and non-linguistic resources at their disposal to compensate their limited proficiency of Japanese to effectively perform the ordering practice of the restaurant. Therefore, this study broadens the scope of language learning to learning how to deploy and arrange various linguistic and non-linguistic resources necessary in learners' everyday activities. This study thereby suggests the theoretical and pedagogical implications of taking language learning as translingual practice.

##### **「ディスカッションの授業において学習者はどのような仲介行動が難しいのか」 (What do language learners find difficult as a mediator in discussion class?)**

**Noriko Hamada, Akita University; Aki Kubo, Tokyo International University**

本発表では、中上級日本語学習者の議論中のやりとりを分析し、仲介行動の観点からその特徴を報告する。ここでいう仲介とは、起こりうる繊細な問題や緊張に向き合い、それを和らげつつ、コミュニケーションや協働ができる状況を作り出す社会的文化的プロセスを指す (CEFR, 2017)。本発表では、グループ内でのコミュニケーション上の困難を乗り越えたり、グループメンバーのアイデアを発展させるために行われる言語行動を仲介行動とする。

仲介行動の困難点の抽出とその原因を探るために、①議論中の談話と、②その議論に対する学習者の認識を分析した。①は授業実践内で収集した議論の談話 (6データ) を、②は学習者が自らのディスカッションを分析する授業での発言及び提出物を対象として分析した。データから、それぞれが順に自分の考えを述べるに留まったり、他者の意見に言及せず、自分の意見を強く主張したりする様子が観察された。これは、1) 他者の意見の不明瞭な部分を確認する、2) 他者の意見を引き出す、3) 相手の意見との共通点や相違点に言及する、といった仲介行動ができていないためだと考えられる。これにより、学習者は自分の意見と相手の意見を結びつけながら考えることができず、自分たちの意見を昇華して、より良い意見を作り出せていなかった。上述した仲介行動が取れなかった原因は、日本語能力の不足というよりも、お互いの意見が十分に理解できていないにもかかわらず、強引に共通点を見出そうとしたり、相違点を言及しようとしめない態度が影響していると考えられる。

**「インタビュープロジェクトを通してよい聞き手になることを考える」 (Learning to be a good interviewee through an interview project)**

**Naoko Takei, Simon Fraser University**

オーラルリンガル法からの変遷を受け、コミュニケーションアプローチの教授法は色々な形で発展してきた。ただ、そのゴールとなるコミュニケーション能力がどのような能力のことなのか、的確に定義されてきていない。また近年は、インターネットなどによる情報網の発達により人々のコミュニケーションのしかたは、変わってきている。違う言語や文化背景を持ち人びとが、実際に接する機会も増えてきている。異文化間の人びとが交流するとき、その接触により起こりうる摩擦や衝突にうまく対応し、円滑なコミュニケーションを行う能力が、これからますます必要になってくると思われる。

そこで今回の発表では、異文化間の交流を円滑に行う能力を育てるために、日本人に対して行うインタビュープロジェクトを、「よい聞き手」になることに焦点をあてた課題として作り上げた試みについて述べる。従来はインタビュープロジェクトの達成度を測るのに、発話に着目し、表現の的確さや、発音、イントネーションの正確さを測定してきた。今回の試みでは、相づちの打ち方や、流れに沿った質問のしかた、など「よい聞き手」になるストラテジーを組み込んだプロジェクトに作り変えた。発表では、インタビューに前の準備、学生たちが提出したビデオの分析、プロジェクト後の意識調査の結果について述べる。特に発話だけに着目して行なっていたプロジェクトのときとの比較をして、学生たちの取り組み方について報告する。語学クラスのゴールとしてコミュニケーション能力を考える上で、発話力だけでなく、「よい聞き手」としての能力にも目を向ける大切さについて提案したいと思う。

**SESSION 4-D: LANGUAGE AND TECHNOLOGY AND PEDAGOGY PAPERS [ RIVERWAY ROOM ]**

**Chair: Nobuko Chikamatsu, DePaul University**

**「COIL (国際連携学習) におけるトランスランゲージング言語教育の意義：日米学生協働翻訳コース」**

**(Translanguaging in a COIL (Collaborative Online International Learning) translation course between Japanese and U.S. college students)**

**Nobuko Chikamatsu, DePaul University; Akiyoshi Suzuki, Nagasaki University**

COIL (Collaborative Online International Learning) は、情報通信技術を利用した海外の教育機関との協働学習活動で、他国の学生との議論を通してグローバルな思考力と柔軟性を育むことを目的とし、米国でも文系理系を問わず様々なコースで英語を媒体に展開されている(Ikeda 2014; SUNY 2019)。米国中西部に位置する本学でも2013年以来、26カ国の大学と50コース余りが開講されたが、日本との協働はこれまでなかった。そこで2018年、文科省とアメリカ教育審議会のUS-Japan COIL Initiativeの支援により、本学の日本語上級学習者と日本の一国立大学の英語教育専攻の学部生を対象に翻訳コースの中で日英両語を使ったCOILを実施した。

本発表ではその概要と成果を報告し、国際連携学習における言語教育の意義を考察する。6週間に渡るCOILユニットはそれぞれの大学の既存のコースに組み込まれ、前半の合同ディスカッションセッション（週1時間が3回）と後半の翻訳プロジェクト（3週間）からなる。合同セッションでは日米の教室をZOOMで繋ぎ、『伊豆の踊子』（原作と英訳二版）を教材に翻訳比較分析等を議論した。翻訳プロジェクトでは米国の個々の学生が進行中の日本語の原作の英訳作業に日本人学生が加わり、ペアで推敲を重ね英訳版を完成させた。双方の学習言語と母語を交えたトランスランゲージングの学習設定の下で、日米学生間の言語的主従関係のない議論や協働学習がどういった意義を持ち今後の言語学習への動機付けになるか、学生と教員のフィードバック（講義履修後のサーベイや講義ノート）を元に考察する。また、時差、開講の時期、言語力、議論スタイル、テクノロジーサポート、大学の教育理念、教員のアプローチ等日米間の課題を挙げ、その改善への提案を述べる。

**「Z世代向けマルチメディアOER：開発報告」 (Developing multimedia OER for Generation Z with a new approach and twist: World premiere and project report)**

**Yuko Kato, Austin Community College; Junko Hatanaka, University of Texas, Austin; Nobuko Koyama, University of California, Davis**

近年教育の現場で増えつつある「ジェネレーションZ (Z世代)」は、YouTube等の情報メディアを介した映像や音声による学習形態を好む (Seemiller & Grace, 2016) 一方ネット上では、新世代特有の視覚型学習スタイル (Wineburg, 2019) に留意した専門性の高い教育動画が不足しており、その開発が期待されている。こうした背景により日米7大学の日本語教育専門家らと各業界の先鋭クリエイターたちによるプロジェクトチームが発足、国際交流基金との連携のもと言語・文化知識ゼロの日本語学習者を対象としたYouTube日本語教育動画シリーズ (8本) を企画・開発した。本シリーズは授業内外での補助教材として、また体系的な学習歴のない独習者の教本として、日本語基礎能力の強化に向け文脈に応じた自然な会話や文化を紹介する。各動画は、笑いの要素を取り入れた新コンセプトの寸劇・言語学者による文法説明・応用会話・非言語的特徴を解説するトリビアの4コーナーから構成され、基礎文法の習得はもとより最近注目のポップカルチャーや軽快なアニメーションを通し日本文化への興味・関心の喚起を目的とする。本発表では一般公開に先がけ日本語教育関係者に動画教材をシェア、9か月にわたる動画制作におけるトピック選定から脚本作成、そして公開に至るまでの開発プロセスを報告する。また試作段階において各大学の日本語学科で実施した、学習者の動画に対する感想・意見などの視聴反応データを考察し、デジタル化の進む教育の場で汎用性の高いOERとしての実効性を検証する。同時に国内外でのオンライン教材推進に貢献できるよう更なる検討を行いたい。

「オンラインツールFlipgridを使ったクラス活動の試み：効果的かつ活発な交流とコミュニケーションを目指して」

**(Using Flipgrid to promote active and effective interaction and communication in the Japanese classroom)**

**Yasuko Shiomi**, University of Massachusetts, Amherst; **Ayako Tanemura**, Boston University

本発表はオンラインツール、Flipgridを使用したプロジェクトの実践報告である。日本語教育においても21世紀型スキルの重要性が叫ばれ（當作2013）、学習者は様々な技能の習得が期待される。それに伴い教師も多様な学生に対応し様々な学習の機会を与えることを求められるが、時間的・物理的制約もありなかなか多くの要求に答えられない。特に「書く・話す」というアウトプット側の指導に十分な時間が割けないと悩んでいる教師が多いのではないだろうか。その問題解決にはオンラインツールの使用が期待されるが、その中でもonline video platformを作るFlipgridは非常に有効である。これは短いビデオを簡単に作成できる無料のツールだが、Youtubeなどとは異なり決められたグループ内でビデオを共有しコメントし合えるだけでなく、教師側の管理も簡単にできる。

本発表の目的は、Flipgridの基本的な使用方法を紹介し大学の日本語初級と中級クラスで行われたプロジェクトを紹介すると共に、オンラインツールの可能性についても議論することである。行われたのは、「一分ニュース」と「作文発表」などのプロジェクトで、終了後はアンケートを実施した。このプロジェクトを通し、ビデオを作成し発信し共有することにより、発話の機会が増え発表能力が高まるなど学習者の日本語能力が向上するのみならず、教室内の交流を促し、学生主導の積極的活動につながるということがわかった。最後に、学生からのアンケート結果と反省点を報告し、新たな学習方法としてのオンラインツールの可能性とメディアリテラシーとの関わりについても議論したい。

**“Three formats of delivery for a beginning Japanese language class: Reflections on hybrid, flipped and face-to-face instruction”**

**Nina Langton**, University of British Columbia, Okanagan

Technological advances in the past decades have allowed us interesting options for delivering content and instruction in our Japanese language courses. While there are many and obvious advantages to frequent and regular face-to-face contact with students, particularly beginning language students, the technical affordances of online delivery systems also offer benefits to both students and instructors. Hybrid courses, where instruction and interaction are mainly conducted online and supplemented with an element of face-to-face contact, can work well for learners who require flexibility in scheduling and physical access, as well as learners who require more time to process spoken language. However, grades, successful completion rates and student satisfaction can be lower compared to face-to-face classes. Flipped classes, where students have initial contact with new material and concepts outside the scheduled class time and then undertake active learning and cognitively-demanding activities during class time when they have direct access to peers and experts who can help them, have shown great potential. Finally, traditional direct instruction in face-to-face classes is a familiar format for both learners and instructors and has tended to be the standard by which other formats are judged.

This presentation reports the reflections of an instructor who has taught the same first-semester Japanese language class in these three different formats. The presentation will offer quantitative results comparing demographics, successful completion rates, and grades on various components, as well as qualitative results from student comments and observations from the instructor. Finally, the presenter will provide suggestions for how to adapt and apply some of the most beneficial elements of each format to the others in order to get the most out of all of the delivery methods.

#### **SESSION 4-E: PEDAGOGY PAPERS [ ARNOLD ROOM ]**

*Chair: Kyoko Matsui Loetscher*, Columbia University

「ソーシャルネットワークキングアプローチに基づいた高校・大学協働ライティングプロジェクトの実践報告」

**(Collaborative writing project among college and high school using Social Networking Approach)**

**Aya McDaniel**, Georgia Institute of Technology

本発表ではジョージア州アトランタにある工科大学と、同じくアトランタ郊外にある公立高校との間で行ったリレー式協働ライティングプロジェクトの実践報告を行う。當作(2014, 2017)はグローバル化が進んだ現代での必要な言語教育としてソーシャルネットワークキングアプローチ (SNA) を提唱し、その言語学習の理念を「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」と提言している。SNAの総合コミュニケーション能力の言語領域では「自他の言語がわかる、学習対象言語を運用できる、学習対象言語を使って、他者とつながる」ことが学習目標に設定され、「つながりの実現」は言語教育の目標の一つとなっている。この「つながり」を目指したSNAの理念に基づいたライティングプロジェクトであるリレー式作文は、初級レベルから実践可能であり、学習者の学び、他者配慮、自己を見つめ直すことなどの効果も報告されている（野口他 2017）。本プロジェクトでは、目的を「日本語で表現できる範囲に気づくこと」「他者との協同学習を楽しむこと」とし、それぞれ『げんき2』を使って日本語を勉強している大学生・高校生で3名から4名でグループを作り、オンライン上で話し合いの場を持ってからリレー式で自由作文を書いた。さらに、プロジェクトの終わりには高校生が大学を訪れ、書かれた作品の中で優秀作品が表彰され、昼食や授業見学を通し実際の交流も行われた。発表では、このプロジェクトの概要、学習者が書いた作品、プロジェクト後のアンケート、プロジェクトでの問題点を元に、このプロジェクトの有効性・今後の運営方法などを考察していく。

**「日本語クラスで性の多様性を扱う-クィア・ペダゴジーの観点から-」 (Implementing gender diversity topics in Japanese class: From the perspective of Queer Pedagogy )**

**Aya Yamakawa**, Earlham College

LGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer)という言葉が使われるようになって久しい。LGBTQは教育の場でも少しずつ理解されてきているものの、以前として学習者や教師が異性愛者であることが前提とされていたり (Nelson, 2009)、LGBTQの学習者の中には同性愛嫌悪を恐れ、アイデンティティを隠している者もいたりする (Nelson, 2009)。特に、日本語教育ではその分野の研究がまだ進んでおらず、LGBTQ蔑視につながるような会話のやりとりや絵カードが扱われている教材があり、それらを扱う際には教師側の配慮が必要であると指摘されている (有森, 2017)。そのため、教師は性の多様性を知り、教科書を扱う際には性的多様性に考慮し、教室活動が安心して行われるような環境づくりが重要になる (有森, 2019)。

そこで、本発表ではクィア・ペダゴジー (Britzman, 1995) の観点から、性の多様性を扱うのを避けるのではなく、あえて性の多様性をテーマにした教材を扱い、LGBTQを可視化した授業の実践報告を行う。クィア・ペダゴジーとは、性的マイノリティやアイデンティティの問題を学びの対象とする。日本語のクラスで性の多様性に関する読み物を読み、それについて学習者と議論することで、規範への批判的なまなざしを育成することができると考える。これらをもとに、安心して日本語が学べるような環境作りの一つの手段としてクィア・ペダゴジーを教室内活動に取り入れる可能性について考察する。

### **“Moving honorifics beyond the classroom: The Linguistic Landscape and the instruction of Japanese”**

**Kunihiko Homma**, University of Hawaii

This study presents a pedagogical approach to the instruction of Japanese honorifics, or '*keigo*,' by utilizing the Linguistic Landscape (LL) in Hawai'i, where Japanese signage is abundant, including signs featuring *keigo*. A growing body of research has incorporated the rich semiotic resources in LL into language pedagogy, but the heretofore-pedagogical applications for languages other than English are scarce. The mastery of the appropriate use of *keigo*, because of its morphological complexity and the indexical nature of *keigo* as social deixis, is challenging for both learners and instructors. Previous studies dealt with *keigo* as a marker of hierarchy and a strong reflection of language ideology. To challenge this static view of *keigo*, recent sociolinguistic studies have discussed its contextual and individual diversity. Nevertheless, JFL classrooms have not yet completely outgrown their exclusive dependence on norm-based prescriptive *keigo* instruction within the easy-to-grasp framework of the hierarchy associated with Japanese uniqueness. Thus, there are calls to set up concrete approaches reflecting sociolinguistic findings that reveal its real linguistic diversity. In response to Sayer's (2009) suggestions and Rowland's (2013) practice of using LL as a pedagogical resource, 22 university students carried out a field assignment to take photographs of the LL related to *keigo* and wrote reflective essays. A thematic analysis of their essays showed that their LL observation in their community acted as training when thinking about *keigo*'s pragmatic functions in space and extended discourse. It also contributed to the development of their language awareness and critical literacy. While realizing the value of learning normative uses of *keigo*, they noticed a variety of sociolinguistic findings such as the variation in *keigo* that few textbooks could effectively teach and questioned the concept of 'standard' *keigo*. This study bridges academic research and educational practice and opens the possibility of practicing critical pedagogy in language courses.

### **「グローバル・コンピテンシーの育成：学際的アプローチによるプロジェクト型学習の試み」 (Fostering global competence: Report on project-based learning using interdisciplinary approach)**

**Kyoko Matsui Loetscher**, Columbia University

急激な変化を遂げる社会の中で、我々は新しい機会に恵まれる一方、様々な難問に直面している。経済協力開発機構 (OECD) は、このような社会で未来を切り開いていくために不可欠な能力を「グローバル・コンピテンシー」と呼び、「重要な課題を多角的に分析・探求し、世界の平和のために行動を起こせる能力」と定義している。そして、この能力を育成する教育の必要性を訴え、そのための枠組みを作成した (OECD, Asia Society 2018)。筆者は、こうしたグローバル・コンピテンシーを育成するために、複数の学問分野から考察するという学際的アプローチ (Repko, Szostak, 2016) を取り入れたプロジェクト型学習を、学期を通して試みた。本発表はその実践報告である。

本試みは、米国の東海岸にある私立大学の上級ビジネス日本語コースにおいて行われた。グローバル化とは何か、グローバル市民としての資質・能力とは何かをテーマにし、社会問題についての意識を高め、その要因を探り、解決を試みた。まず、学生一人一人が時事ニュースを一つ選びクラスで発表、その後クラス全体で討論を行った。次にグループで一つの社会問題を選び、その要因分析に必要な複数の学術分野を選び、各々が各学術分野での調査結果及び解決方法を持ち寄った。そして、各々の解決方法の矛盾・相違点について話し合い、共通基盤を考案し、最終的な解決法へ導くという協働作業を行った。その後レポートにまとめ、クラス内外で発表し、意見交換をした。本発表では学生のアンケート調査を紹介するとともに、この学際的アプローチによるプロジェクト型学習の意義と有効性について考察する。

## **SESSION 4-F: LITERATURE PANEL [ OLMSTED ROOM ]**

**Chair: John Holt**, Portland State University

### **Panel Title: Our Bodies Are Not the Same: Body, Sexuality, and Gender in Manga**

Manga (Japanese comics) has emerged as a central medium for exploring gender and sexuality, both in terms of what it means for Japanese producers and consumers, as well as its significance for a growing international audience—many of whom first found a sense of community in fan groups for queer manga. This panel expands the conversation surrounding queer manga in the West by examining foundational authors, genres, subgenres, and forums that are integral to the exploration of queer and unconventional identity in Japan, but largely unknown in Western manga and queer discourses. Through integrating key figures of the *shōjo* (girls'), *shōnen* (boys'), and *josei* (women's) manga genres ranging from the 1960s to the present, this panel proposes that mainstream manga has long destabilized body sameness and sexual orientation across genres, rather than just—

or even primarily—in the boys' love subgenre. We consider how genre conventions (horror, romance, and action) come into play in alternatively reinforcing conservative norms and allowing for the possibility of critique and deterritorialization. A central theme of the panel is how key manga creators who have received little critical attention in the West, such as Umezu Kazuo and Maki Miyako, challenge genre conventions by destabilizing tropes surrounding sexing and gendering bodies. By theorizing identity, both in terms of content (transforming bodies and transformed gender) as well as how fans and readers consume and form communities around manga, our panel demonstrates manga's role in contemporary struggles to (re)define agency, body, voice, sex, and gender.

#### **"Representation of the female body in Maki Miyako's women's manga"**

**Hiroimi Dollase**, Vassar College

My presentation will focus on female manga artist Maki Miyako's works for mature audiences. Maki, who debuted in 1957, is generally known for supporting the development of *shōjo* manga [girls' comics] culture during its nascent era. However, around 1970, Maki made a sudden transformation as a *mangaka* [manga creator] of *josei* [women's] to the *seinen* [young men's] genre, shifting her target readership from girls to women. Released from the conventions of *shōjo* manga, Maki began employing the cinematic *gekiga* style associated with serious, realistic, hard-boiled men's comics in works that thematized women's love and sexuality, often graphically portraying female bodies. She often depicted promiscuous single working women having romantic relationships with married men. Married women that do appear cannot constrain themselves to domestic roles; not to be trapped as perfect wives, they have extra-marital affairs. Her stories always feature struggles for dominance and control between women and men, in which women's bodies are treated as a site of conflict.

Although Maki's career spanned multiple decades, my analysis focuses on her works from the 1970s, at a time when women were transforming the manga world by rejecting conventions that had heretofore confined *shōjo* manga's narratives. In these works, Maki examines women's interiority and psyche through motif, symbolism, and visual stylistic devices, often engaging with the work of female fiction writers such as Tamura Toshiko. Maki's shift from *shōjo mangaka* to *josei mangaka* demonstrated that manga's potential to express women's sexuality and physicality in the visual language of men's serious comics.

#### **"The illusion of sameness: Umezu Kazuo's Snake Girl "**

**Jon Holt**, Portland State University

Umezu Kazuo (1936- ), like Mizuki Shigeru, catapulted to success with his monster stories that scared younger readers in the 1960s *yōkai* boom. Umezu skillfully used his background in *shōjo* manga to captivate and torment a new audience. He wedded the fear of the unknown with other genre elements, such as everyday life (*seikatsu*) and interiority (*naimen*). Umezu often used female snake creatures to antagonize his girl protagonists, as in *Snake Girl* (Hebi *shōjo*) and "Snake Lady" ("Hebi obasan"). Using the former, his most recognizable horror-*shōjo* manga, I explore how the illusion of sameness between the protagonist and her near-identical girl friend, who becomes the Snake-Girl antagonist, generates repulsive fears of female identity.

In *Snake Girl*, the Yamabiko sisters must to save their look-alike classmate Yōko from Mother Snake and snakehood. That the sisters and the classmate look alike is intimately tied to what Deborah Shamoon has termed *shōjo* manga's "aesthetic of sameness," in which girl bestfriends, aka "sisters," are generally depicted as nearly identical. With "sister relationships" the protagonist's mind becomes seemingly more accessible to readers precisely through doubling the same-sex partner (homosocial or homosexual). Umezu turns this familiar similarity into a tool to incite dissonance and ontological horror, by asking readers what happens when their pure girl double selves are corrupted or they begin to feel more snake than *shōjo*. With his 1960s *shōjo* manga, Umezu foreshadowed the more experimental 1970s *shōjo* artists, who extensively explored sexuality and bodies, by similarly exploring anxieties and fear of the self.

#### **"Boys who crossed borders: Representations of male genderqueer identities in *shōjo* manga"**

**Keiko Miyajima**, Adelphi University

Since its inception, *shōjo* manga has long engaged with narratives of gender non-conformity. In particular, female cross-dressing has been read as a symbolic act of resistance by women to imaginatively set themselves free from gender restrictions. However, there are also a number of cross-gendering male characters, which have not garnered much academic attention. This paper will examine the figures of cross-dressing, cross-gendering men in *shōjo* manga since the 1970s, in particular in the works of Oshima Yumiko, Tada Kaoru, and Higashimura Akiko, and demonstrate how such characters embody girls' desires and needs for non-heteronormative models of masculinity and romance.

Compared with other members of the Year 24 Group, who more explicitly explored sexual/gender issues, Oshima's works are known as quintessential *shōjo* manga, embodying girls' dreams for ideal romance with happy endings. However, some of Oshima's works highlight gender-fluid boys willing to perform an opposite sex or gender role, reflecting how *shōjo*-manga artists reject patriarchal masculinity. Oshima's frequent portrayals of male cross-dressing and trans-identification anticipate the emergence of genderqueer figures in *shōjo* manga, exemplified by Tada's and Higashimura's works.

Representations of male trans-identities in these texts indicate both *shōjo* readers' desire for heterosexual romance and their need for non-threatening, gender-variant men. Quite often, a boy's gender-crossing act or behavior plays an important role in developing the heroine's romantic interest or psychological attachment, making him an ideal figure with feminine sensibility. Thus, the relationship between him and the heroine can be read as a non-heteronormative relationship evoking female homoerotic intimacy.



**“I’m proud I was born me”: Blue Flag’s queer and feminist dialogue in Shōnen Jump Plus)**

**Mia Lewis**, Stanford University

KAITO’s Ao no furagu (Blue Flag, 2017–now) has created a queer-positive, feminist community on Shōnen Jump Plus—the online forum of Japan’s most popular manga magazine, Weekly Shōnen Jump. Serialized online-only, Blue Flag is accessed as an image-link amidst a wide array of works, from sports to erotic manga, new works to classics. Blue Flag plays upon tropes and genre conventions employed in these surrounding series, confounding our expectations, and at the same time encouraging heartfelt conversations about contentious social issues in Japan today, including the stigma faced by LGBT youth and the impact of sexual abuse. Throughout Blue Flag, KAITO asks readers what gender does and should mean. As the series progresses, it transforms from a quiet story of high-school life into a forum for debating social issues via disembodied monologues and character dialogues, often combining logic, ethics and experiences. While Weekly Shōnen Jump is often criticized for sexist and misogynist comics and professional practices, Blue Flag’s comments section features up to a hundred comments per day seriously discussing issues including LGBT stigma and gender stereotypes, thereby creating a safe space on Shōnen Jump’s website for these difficult discussions. My talk addresses the different ways in which LGBT, queer, and gender issues more broadly are discussed on multiple levels in Blue Flag by considering not only the manga’s literal dialogue, but the dialogue between commentators as well as that with other Jump works.

**4:40 p.m.–5:30 p.m. — Keynote Session (The Fens Room)**

**Keynote Presentation: Epistemic Asymmetry and Involvement: Another Look at the Sentence-final Particle *yone***

**Naomi McGloin**, University of Wisconsin, Madison

Sentence-final particles have been the subject of many studies. *Ne* and *yo*, in particular, have been intensively investigated from various perspectives. Ogi (2017) roughly divides these studies into five groups: syntactic, cognitive (e.g., Kamio 1990; Takubo & Kinsui 1996), illocutionary force (Uyeno 1971), Interactional (e.g., Morita 2005; Hayano 2013) and social (e.g., Cook 1992). The particle *yone*, on the other hand, has been less studied, although substantial works do exist, represented by Hasunuma 1992, Nazikian 1996 & 2018, Izuhara 2003, Ohso 2005, Asano-Cavanagh 2011, Saigo 2011, Hayano 2013, and Xu 2016. Since both *yone* and *ne* are said to have the function of seeking confirmation or agreement, or showing rapport, the difference between *yone* and *ne* has been somewhat elusive. In the present presentation, I will attempt to delineate their usages, in conjunction with the notion of ‘involvement’ as developed in Lee (2007) and Ogi (2017). I will also briefly touch upon how these items are dealt with in Japanese textbooks and will reflect on how we can make such findings relevant for Japanese language teaching.

**Other AATJ-sponsored Events in Boston**

Friday, March 20, 9:00 – 10:45 a.m., Hynes Convention Center, Room 200, Level 2

**Beyond Content-Based Instruction:**

**Japanese Language Collaborations with Japanese Studies to Optimize Learning**

This panel is part of the Association for Asian Studies program and requires registration for the AAS conference.

*Chair:* **Anna Zielinska-Elliott** (Boston University)

*Panelists:*

**Nobuko Chikamatsu** (DePaul University)

**Hideki Hara** (Japan Foundation – Los Angeles)

**Danielle Rocheleau Salaz** (University of Colorado)

**Emi Yamanaka** (Boston University)

At a time when both Japanese studies and Japanese language programs are under pressure to maintain stable enrollments and attract a growing and diverse population of students, collaborations among faculty across departments in language and studies areas are offering a wider variety of courses that give students opportunities to expand their language skills and connect them with other areas of study.

This round table session describes creative ways in which Japanese language and Japanese studies faculty are collaborating on innovative learning experiences for students. Participants will describe courses that integrate language and content in subject areas that include literature, history, environmental studies, religious studies, history, philosophy and ethics, media studies, business, and other specialties. Students majoring in Japanese are able, for example, to earn credit toward their major by participating in a special section of a modern history course in which they read original source materials in Japanese with the help of a language assistant. Alternatively, they read short literary works in the original to supplement their study of the work

of popular Japanese authors in translation. Students with varying levels of Japanese language skills were able to participate in varying ways in the integrated class.

After specific examples are presented, a general discussion will focus on the role of collaborations in expanding Japanese studies offerings at a variety of institutions; the possibilities for new initiatives like the CLAC (Culture and Language Across the Curriculum) Collaborative and the US-Japan COIL (Collaborative Online International Learning) Initiative; and future directions for Japanese language and Japanese studies in the US academy.

Friday, March 20, 7:30 – 9:30 p.m., Boston Common Room

**Classical Japanese SIG Roundtable and Meeting** (AAS registration not required)

Transmission of knowledge and praxis in the traditional literary arts of Japan usually occurred orally from master to disciple. Wider distribution of a master's teaching, or the practices of a school, was made possible through manuscripts which often took the rhetorical structure of a dialogue—a *mondō*—between the master and a student. For the 2020 Classical Japanese Special Interest Group meeting at AATJ in Boston, we would like to mimic the *mondō* format in order to create an inter-generational discussion about bungo pedagogy best practices. To facilitate this discussion, we have asked an experienced teacher of classical Japanese—**Joshua Mostow** of the University of British Columbia—to engage in a dialogue with a less experienced teacher—**Ariel Stilerman** of Stanford University. Their questions and answers will be the springboard for a discussion among meeting attendees centered on issues such as materials, methodology, “branding,” and the future trajectory of bungo teaching and learning in the West. Please join us for what will surely be a stimulating and useful discussion.